

## 第2章 最初の赴任地

——鳳翔での3年間

### ■次韻水官詩

嘉祐<sup>かゆう</sup>6 (1061) 年、蘇軾<sup>そしよく</sup>、26 歳。

前の章で見たように蘇軾は、父の蘇洵<sup>そじゆん</sup>、弟の蘇轍<sup>そてつ</sup>とともに前の年の2月春に都に着いた。その直後の4月8日に恩人の梅堯臣<sup>ばいぎょうしん</sup>が都で亡くなっている。

兄弟は都に着くとすぐに実際の官職を授かるための審査を受けた上で、地方の町の書記のような役をそれぞれ与えられた。しかし、それは辞退し、特別試験<sup>せい か</sup>の制科を受けることにした。2人が授かった役職は科擧の最終試験の成績順に対応するもので、歐陽脩<sup>おうようしゅう</sup>らはそれは2人の本来の才能に見合うものではないとして、兄弟に制科の受験を勧めるとともに、制科の実施を諸方面に働きかけた。制科は、皇帝の意思によって不定期に行われる特別な試験で、朝廷の有力者の推薦を得て受験し、合格者すれば官界において特に優遇された。制科の実施が決まると、兄弟は家に閉じこもって試験の準備に専念した。

その一方で、蘇洵は歐陽脩らがその能力を高く評価してくれたことで、

試験によらずに特例で官職を得ることができた。当人は、国が自分を必要とするのなら試験を課すまでもなく用いればよいだけのことだと意気軒昂であった。蘇洵には人を引きつける独特の魅力があったのだろう、都にある浄因寺じょういんの大覚璉師だいがくれんから、唐とうの時代の閻立本えんりつほんが水官（水神）を描いた国宝級の画がぼんとプレゼントされた。その謝礼として蘇洵は詩を書いた。さすがに1篇の詩では釣り合わないと思ったのだろう、蘇軾にも同じ韻で詩を作らせて謝礼を2倍にした。

自然の理に通じた人は画を学ばずとも、  
天性のままに絵筆を用いることができるのだろう。  
泳ぎの上手な人は、水というものをよく知っているので、  
初めて船を漕いても巧みに操れるという。  
閻立本は元来は儒者で、文章の妙に通じた先人を慕い、  
画はたまたま戯れに始めただけだった。  
好んでいつしかやめられなくなり、  
筆の勢いは翻る風のようにであった。  
唐の太宗皇帝たいそうはあるとき池に舟を浮かべて遊び、  
珍しい水鳥が水に戯れるのを見て、  
一人に詩を作らせ、閻立本に画を作らせた。  
閻立本は家に帰ると、子に向かって言った。

「私は学问をした人間でありながら、

今日は画によって天子のお召しを受けた。

おまえたちは決して私のように画を習ってはいけない」

時に太宗皇帝は四方の平定を成し遂げ、

南の国からは白い雉が、西の国からは青い蓮が献上された。

そのときのありさまを閻立本は水神の集まりになぞらえて描いた。

竜にまたがって天に昇ろうとする神が皇帝、

大亀の背に乗って左右に従うのが大臣、

熊や豹のような面々は異国からの使者だ。

唐の太宗皇帝の功績はまさしく神のようであって、

後世に並ぶ者がなかった。

その唐朝にも亡ぶときがきて、

あまたの盗賊が国土を偷み合い、

都は三日間の猛火に包まれ、皇室の至宝は煙と消えた。

天の神には天官、地官、水官がいて、

閻立本の画は水官を描いたものであり、

しかも神のわざによるというてよいものであったから、

天もこれを焼かせてはなるまいとしたのだらう、

火より脱出させ、東に出て、いまや宋の都にきたのだった。

都の貴人はこの画をいざかり、

あの手この手で大覚瓊師に話もちかけた。

高僧は一切心を動かすことなく、

我が父が頂戴することになった。

あまたの宝物を積んだところで高僧のお心にかなうべくもないので、

父は一篇の詩をもって返礼とし、

画の前に清らかな紙片を置かせていただくのである。

## ■楽毅論

蘇軾と弟は、制科の一次審査として政策や歴史を論じた 50 篇の論文を提出した。その中から 3 篇を訳出する。

「楽毅論」は、中国古代の戦国時代（秦による全国統一前の分裂期）の武将楽毅を論じたもの。楽毅は小国の燕の昭王を助け、隣の大国の齊を滅亡寸前にまで追い込む活躍をした。蘇軾の原文は種々の歴史的事実を前提として書かれているが、ここの訳文では大意がわかるよう適宜補足した（逆に省いたところもある）。

為政者が徳をもって天下を治めるのを「王道」といい、武力をもって治めるのを「霸道」という。「王道」を用いて「王者」になった例としては古代の三人の王が有名であり、「王道」を用いることができなくて「覇者」になった例としては春秋時代の五人の王が有名である。

ある人は、「王道を用いようとするならば、もしもそれが成功しなかった場合でも、一歩下がって霸道を成し遂げることができるであろう」と論じている。本当にそうだろうか。五人の覇者がもしも三人の王者の真似をしていたなら、ただ単に大失敗するだけだったのではないだろうか。

私が考えるに、王道というものは小さく用いることはできない。大きく用いれば王者になるが、小さく用いたならば亡ぶだけである。

昔、徐<sup>じょ</sup>の国<sup>こく</sup>の偃王<sup>えんわう</sup>は、仁義を重んじて王道政治を志し、民衆を戦争に動員するのをためらった。そのために、敵国の侵入を防ぐことができず、結局は国を亡ぼしてしまった。宋<sup>じょう</sup>の国<sup>こく</sup>の襄公<sup>じょうこう</sup>も仁義を重んじて王道政治を志し、人の弱みに付け込むのはよくないことであるとして、戦闘の好機を自ら逃し、国の命運をかけた戦争で大敗してしまった。

二人はなぜ国を亡ぼすような失敗をしたのか。二人が実際に行ったことと、二人が求めたものとかかけ離れていたからである。二人は王者であるとの評判を得たが、王道を矮小化して用いたのである。天下の人々の評判を気にするのではなく、徳によって天下に正しい統治を及ぼせる者だけが、真の王者となり得るのだ。

この二人とは逆に、王道などは念頭になかったけれど、剛毅にして果敢にも迷わず事を成し遂げた者がいた。その一例が范蠡<sup>はんらい</sup>である。越<sup>えつ</sup>の国<sup>こく</sup>の王<sup>わう</sup>の勾踐<sup>こうせん</sup>は艱難辛苦の末に呉王<sup>ごわう</sup>の夫差<sup>ふうさ</sup>を破った。越王<sup>えつわう</sup>の軍に包囲された夫差は懸命に命乞いをし、越王は夫差を憐れに思い、赦してやろうとした。そのとき范蠡は、呉王の使者を追い帰して軍を進め、夫差を自殺に追い込み、将来の禍根を絶ち切った。も

う一つの例が張良だ。漢の高祖は、旗色が悪くなった項籍が戦闘を止めて東に引き上げようとしたとき、自分も戦闘を止めて西に帰ろうとした。項籍と天下を二分することで満足しようとしたのだ。しかし、張良は「天が項籍を亡ぼそうとしているのです。いま急襲し、それを逃してはなりません」と言って高祖に戦わせ、ついには項籍を撃ち取って天下を統一した。

この二人は、ちまちまとちっぴけな仁義を守ることを、大きな成功を勝ち取ることよりも優先させはしなかったのである。

楽毅はいかなる人物であったのか。戦国時代の英雄の一人ではあった。しかし、王道が大きなものであるということをしらなかった。王道を聞きかじっただけで、自分も使ってみようとしたがために、我が身を破綻させてしまったのだ。

楽毅は、燕の昭王が自分を全面的に信頼して用いてくれたことに応えようと、宿敵の斉国に攻め入り、五年にわたって敵地で戦い続け、斉国の七十余りの町を占領し、残る敵の拠点は二カ所だけとなった。そのとき昭王が死に、息子の恵王が立つと、斉国の間者は「楽毅がたった二つの町をぐずぐずいつまでも征服しないでいるのは、斉の地で独立して王になる機会を伺っているからだ」との偽の情報を燕の国に流した。もともと楽毅の存在を煙たく思っていた恵王とその取り巻き連中は、別の將軍を派遣し、楽毅を本国に召還しようとした。楽毅は帰国すれば殺されてしまうかも知れないと恐れ、隣の国に亡命した。楽毅がいなくなると、斉国はたちまち息を吹き返し、占領されていた土地をことごとく取り返し、昭王と楽毅の努力は虚しく消えてしまった。

このことから、燕の恵王が愚かで、間者の言うことを信じたために、楽毅の事業は不幸にも成就しなかった、楽毅自身の軍事的失敗ではないと、多くの人は論じている。

私はそのようには考えない。もしも昭王が死ななくて、偽の情報を間者が放っても無効であったとしても、楽毅はきっと失敗したに違いない。どうしてそのように考えるのか。

第一に、燕国が齊国を併合することは、当時、秦国、<sup>そ</sup>楚国、<sup>しん</sup>晋国などの列強にとって利益にならなかった。燕国は百万と号する軍団を外に出して、残る二つの町を攻めて、数年かかって決着がつかずにいた。大軍が長く外に出ていれば、国は疲弊し、必ず事を為そうとする者が内に出てくるものだ。国の内側が乱れ、そこを外から攻めたならば、いかなる名将であっても防げるものではない。

第二に、楽毅はわずかに二つの町を、百倍の兵力で攻めて、数年がかりでも勝てずにいたのは、その智力が不足していたからではない。楽毅は聞きかじりの王道を用い、仁義の心で齊国の民衆を己に靡かせようとしたからである。一気に攻めて齊国の民衆の怨みを買うことになるのを避け、王道を用いたとの評判を立てたいものだと思っているうちに、長い時間を使ってしまったのである。

楽毅のその考えには根拠がなかったわけではない。齊国の民衆は、齊の<sup>びん</sup>潛王の横暴に苦しんでいたのだから、もしも楽毅が一度戦闘を止め、法令を整え、税金を安く、齊の民衆を村落に帰還させて、安定した暮らしを保障したならば、一体誰が齊国ために立ち上がって戦おうなどと思ったりしただろうか。それこそが王道と

いうものではなからうか。

しかるに、楽毅は百万の軍団を率いたまま、斉の民衆が心服するのを待ったのだ。これは、斉国にじっくりと国土回復の謀はかりごとを為させるための時間を与えただけであったのである。

この当時は戦国の世であった。軍事的に強いところが弱いところを併呑することが普通に行われていた。楽毅が斉を攻めて滅したところで、誰も非難できなかったし、楽毅が王道を真似てみせたところで、それを褒める者は誰もいなかった。つまり、王道を大きく用いる者は王者になるが、王道の何たるかを心得ずに形ばかり用いたのでは、失敗しても覇者になるということではなくて、結局のところ王者にも覇者にもなれず、ただ天下の笑いものになってしまうのである。

(この論文には蘇軾の史論の特徴がよく出ている。「王道政治」という(儒学が基本的素養として行き渡っていた社会では)極めて重要な理念をベースにして、一般的に流布している見方に対して異論を唱えている(独自の見解を提示できないのなら書く意味がない)。最初に基本原理を置いて立論するというスタイルを(父の蘇洵から受け継いで)とっているのである)

## ■留侯論

次は留侯りゅうこうを論じたもの。留侯は上の「楽毅論」で触れられていた張良ちやうりやうである。張良は劉邦りゅうほう(漢の高祖)を助けて天下統一を成し遂げ、留の領地を授かったので留侯と呼ばれる。

古の豪傑いごえとされるような士ひとは、必ず人よりも勝れて堅い心根こころね、すなわち「節」を備えていた。

人の情こころとして我慢できないものがある。並みの人間ひなび、「匹夫」は恥辱を加えられたなら、剣を抜いて立ち、身を奮って闘うだろう。これは「勇ゆう」というほどのものではない。天下には「大勇たいゆう」というべきものがある。突然目の前で事が起こっても驚かず、理由なく恥辱を加えられても、大勇のある者は怒らない。心の内に抱くものがはなはだ大きく、志すところがはなはだ遠大であるからだ。

張良は橋の上にいる老人と出会い、いろいろと振り回された末に軍書を授けられたという。それは非常に怪しいことのようにはあるけれども、秦の世しんに隠れた君子がいて張良を試してみたということがなかったとはいえないだろう。老人が何を考えていたのか、微かに見えるところから推測いしよするに、古の聖賢が世の人々を戒めたのと同じ意味のことがその根本にあったのだろう。世間の人々はそういうことをきちんと考察しないで、軍書はまがいものだったと決めつけるのは誤りである。そして、本当に大切なのはその書物ではなかった。

戦国時代の終わりに張良の母国の韓かんが亡ばされ、秦がますます盛んになったときに、秦は首を切る刀と煮殺す釜ひとを使って天下の士を意のままに動かそうとした。そのため罪なく殺された者は数えきれないほどであった。秦は法をはなはだ過酷に用いたので、その鋒先は触れることもできないし、その勢いは逃れようがなく、どれほどの勇者であっても手も足も出なかった。

このとき張良は怒りに耐えられず、我が力でもって一発ぶちかまして、思いを晴らそうと、始皇帝を暗殺しようとした。そのときに張良は紙一重のところ死なないですんだのだが、非常に危うかったのである。

大金持ちの子は盗賊によって殺されることはない。なぜなら、金などよりもその身が大切であって、盗賊のために死ぬなどありえないのを知っているからだ。張良は世を蓋うばかりの才能をもっているのに、古の名宰相のような謀を用いるよりも前に、単なる刺客となって死んでしまわなかったのはまことに僥倖であった。それこそが、橋の上の老人が張良のことを深く惜しんだ理由である。老人は尊大かつ傲慢に振る舞って張良の意気を挫き、よく忍ぶことができるのをみた後に、大事を成し遂げられると見なした。それで老人は張良に「こやつ、教えがいがある」と言ったのだ。

その昔、楚の莊王は鄭の国と戦って破った。鄭の主は莊王の前に完全服従の姿で現れ、我が身と国を莊王に委ねた。莊王は言った。「人に対してこれほどへり下ることができるのだから、きっとその民に信頼されてよく治めることであろう」。莊王は鄭の主を今まで通りに許した。その昔、越の国の王は会稽で呉の国の王に敗れた。それから三年の間、倦むことなく呉の王に徹頭徹尾仕え、報復の機会がくるのを待った。

相手に報いてやろうとの志があって、しかし相手に下ることができないのは匹夫の強がりではない。だから、かの橋の上の老人は、張良には才能が十分にありながらも、その度量が不足しているのを憂い、その若さ故の強く鋭い気分を挫いて、

小さな怒りを耐え忍んで大きな謀をさせるよう導いたのである。

張良と老人は平生から馴染みだったのではない。偶然出会い、老人は張良を下僕のようにこきつかい、それでも張良が平然としていたのは、後に秦の皇帝も張良を驚かすことができず、楚の項籍も張良を怒らせることができなかったおおもとがそこにあったからである。

漢の高祖と楚の項籍が天下を争って、最終的に高祖が勝利して項籍が敗れた。その理由は、耐え忍ぶか耐え忍ばないかの違いだけだった。項籍は忍ぶことができなかつたので、即座に戦い、百戦して百勝し、軽々しくその鋒先を用いた。高祖は忍ぶことができ、その鋒先を大切に養い、項籍が疲れるのを待った。これは張良が教えたのだ。高祖と行動をともにしていた韓信かんしんが自立して王になろうとしたとき、高祖は怒りを発して、そのことが言動に現われ出た。これを見れば、高祖には剛強で忍ぶことのできない気分があったことがわかる。そのときに張良がいなかったならば、高祖は韓信と無用な戦いを起こしてしまって、最終的な成功に果たして到ることができたろうか。

司馬遷しばせんは張良の事跡を史書に著し、張良のしたことは驚くばかりに偉大であったけれども、その顔や身のこなしは婦人のようであったと伝えられていて、姿と志気不一致なのは奇妙であると考えた。しかし、これこそがまさに張良が張良であった所以であるのだらう。

(蘇轍そてつは文治主義の人で、勇猛な楽毅を低く、婦人のような張良を高く評価したのである)

## ■教戦守策

これは政策を論じたものの1篇で、平和を維持するには民衆に軍事訓練を施して自衛能力を高める必要があると主張している。

現在の民衆の患いはどこにあるのか。安きを知って危きを知らず、安逸に走って労苦に耐えようとしないことにある。この患いはたとえ今は見えていなくても、将来は必ずはっきりと見えるようになる。いまその対策を採らなければ、将来は救いようがなくなってしまだろう。

昔の偉大な為政者は、「兵」(武器および兵士)をなくすことはできないと考えていたし、天下が安定していても戦を忘れることはなかった。秋と冬の間、民衆を引き連れて獵を行い、そこで武を指導し、進み方、退き方、留まり方の作法を教え、鐘や太鼓や旗による合図を習わせて乱れずに行動できるようにした。そのようにして、いざ切ったはったの事態になっても民衆が怖がらないようにしたので、盗賊が異変を起こしても民衆が驚いて大混乱に陥るようなことはなかった。

ところが、後の世においては、学者が机上の空論を展開し、兵をなくすことをもって王者の最も優れた行為であるとした。天下が定まると、甲を仕舞い込み、数十年もするうちに軍を用いることはすっかり廃れ、民衆は日に日に逸楽に流れてしまった。そこに突如として盗賊が現れ出ると、民衆は恐れ慄き、流言に驚き、戦わずに逃げ去ったのだった。

実際に、唐の玄宗皇帝の治世の後半には、天下は大いに治まっていたのではなかったか。民衆は太平の楽しみにふけり、遊戯や酒食の中で過<sup>たげ</sup>し、剛き心も勇気もすっかり鈍って消え去り、腰抜けとなってまったく奮わなくなっていた。だから、安<sup>あんろくざん</sup>祿山なるつまらない男がひとたび出ると、その世情に乗じて増長し、四方の民衆はただ走って逃げるか、急いで囚われの身になるしかなかった。これより天下は分裂し、唐の皇室は衰微してしまった。

このことについて少し論じてみたい。天下の勢いは譬えれば人の身体のようなものである。王公、貴人は、自身の身体を養うこと至れり尽くせりであろう。それなのに普段から病が多いことに苦しんでいる。農民や身分の低い者は一年中辛苦してばかりいるのに、かえって病気にはならない。風雨、霜露、寒暑の変化は病が生じるもとである。農民や身分の低い者は盛夏にも力を込めて作業し、冬にも身を寒さに曝し、その筋肉や骨はいつも衝撃にさらされ、その肌はいつも寒さ暑さに侵されているので、霜露にも風雨にも慣れて、寒暑の変化も身体に毒となることはない。王公、貴人は大層な屋敷に住み、外に出るときは駕籠に乗り、風が吹けば皮の上着を着て、雨が降れば傘で蓋って、患いを慮っての道具の備えが十分でないことはない。患いをひどく畏れ、それに備えることがはなはだ過剰であるから、少しでも意のままにならないところがあると、寒暑の変化が身体に入り込んでしまうのだ。だから、その身を本当に養う者は、上手に患いから逃れようと、身体に労苦を味あわせ、歩行、動作においてその四体を寒暑の変化に慣れさせるのである。それによって、身体は剛健、強力となって険しいところを渡っても損なわれる

ことがないようにするのである。民衆もまた同じである。

今、天下は久しく泰平で、民衆は驕って怠惰となり脆弱々しく、婦人や子供が家から出ずに籠っているのにも似ている。だから戦闘について論じたりするだけで首を縮めて震え、盗賊の名が出ただけで耳を覆って聞まいとする。そして士大夫も用兵について言おうとしない。用兵について言えばそれが民を乱し、次第に乱れが大きくなってしまおうと考えている。それはあたかも畏れることがはなはだしくて、養うことが過剰であるのと同じではなからうか。

そもそも天下にはいつでも意外な患いがある。愚者は四方に事が無いのを見ると、変事などもうありは無いと思込んでしまう。しかも、いまは四方に事が無いわけではない。我が国の北には遼国<sup>りょう</sup>、西には夏国<sup>か</sup>があって、この二国に対して我が国は毎年百万をもって数える歳幣<sup>さいへい</sup>(平和を維持するための経済支援)を贈っている。二国に奉仕する我が国の財力は有限であり、それを求める二国は満足することが決していないのだから、その勢いの延長上には必ずや戦が生じるに違いない。戦が必然の勢いであるときに、我が方が先んじなければ、彼の方が先んじるであろう。それは西から出なければ、北から出るであろう。予測できないのは、遅いか早いか、遠いところからか近いところからかであって、いずれにしても免れることは決していないのである。

兵を用いることがどうしても免れられないときに、徐々に用いられるようにしておかないで、民衆を安楽無事の中に置いたままにして、ひとたび事が起こってから、初めて民衆を危うい場に行かせようとしたならば、その患いはきつと予測できない

ことになってしまうであろう。だから臣は、<sup>わたし</sup>最初に、安きを知って危きを知らず、安逸に走って労苦に耐えようとしないと指摘したのである。これこそが天下の最も大きな患いであると臣は考えるのである。

<sup>わたし</sup>臣はこのように提案したい。士大夫には武勇を尊尚させ、兵法を講習させる。庶民でお上の仕事に就いている者には行陣の決まりを教える。盗賊を取り締まる役を担う者には剣や鉾の術を授ける。一年の終わりにこは人々を役場に集めて、古の武芸試験のように、勝負をさせ、勝ち負けによって賞罰を与える。このようにすることが久くなるならば、民衆は軍法によって事に従うようになるだろう。

しかし、議論を建てる者は、故なく民を動かし、軍法で脅かすと、民衆は安らかでなくなってしまうと言うであろう。<sup>わたし</sup>臣はそうでなく、このようにすることこそが民衆を安んずるものであると考える。天下は兵を去ることはできない。何か事があったときには、用兵について何も教えていない民衆を駆り立てて一体どうやって戦おうとするのか。故なく民衆を動かして小さな怨みを引き起こすかも知れないことと、備えをしないこととの一体どちらが危ういのか。

いま兵士として集められている者は、傲慢にも驕り、しかも国家に怨みを抱く者が多くいて、民衆を圧迫し、国に不法な要求さえしている。なぜそのようになっているのか。その連中は、天下の内で戦を知るのは我等だけだと考えているからだ。もし、民衆に兵を習わせたならば、このような連中も対抗する者がいると知って、その驕った気分が挫かれて悪たくみをしなくなるだろう。

利害の判断ははなはだ明確なのではなかるうか。

(幾つか補足する。(1)「昔の偉大な為政者」と訳した原文は「先王」である。「先王」は儒学の重要な概念の一つである。遠い昔の夏、殷、周の三代の世に天下が最もよく治まった時期があり、そのころと同様の世の中を実現(再現)することが儒学を学んだ者の使命であるとされた。三代の世に理想の治世を現出した偉大な為政者を「先王」あるいは「三代の王」といい、具体的には、夏の時代の堯や舜、殷の時代の湯王、周の時代の文王、武王、周公旦を指す。「先王」の統治にどれだけ近づけるかで政策の優劣を論じるのが、儒学者が議論を展開するときの基本パターンとされ、蘇軾のこの論文もそれに則っている。ただし「先王」がいかなる統治をしたのか明確な記録が残っているわけではないので、(それらしいこと言いさえすれば)かなり自由な立論が可能であった。(2)宋の人々にとって、唐の世を揺るがした安祿山の乱は常に回顧しなければならない歴史的な大事件であった。とりわけ蘇軾が生きた時代は宋の極盛期に当たり、唐の玄宗皇帝の時代とまさに対比された。(3)士大夫とは、宋代においては科挙に合格して官僚になった者(およびそれに準じる者)を指す。科挙は隋の時代に始まり、唐の時代にはかなりの数の科挙の合格者が官僚として採用されたが、社会の上層部はなお貴族によって占められ、科挙の合格者はそれを補完する存在でしかなかった。宋に入ると、貴族は消え去り、家柄によらず科挙に合格した者が宰相にも昇れるようになった。はっきりと実力社会に変化し、科挙の合格者(すなわち士大夫)には己の能力を最大限発揮して国のために尽くしたいとの高い志を持つ者が多くいた(もちろん蘇軾もその1人)。(4)宋の統治機構は、その根幹を士大夫が占め、従って文官優位で武官は軽んじられた。宋は東アジアの超大国であっても軍事的実力はは

なはだ心もとなく、北の遼<sup>りょう</sup>国と西の夏<sup>か</sup>国からの圧迫に常時苦しめられた。遼国に対して、宋は建国以来連戦連敗で、蘇軾が生まれる 30 年ほど前に、かろうじて得られた勝利を機に、遼国との間に平和条約を結んだ。それは、宋は遼に対して兄であるという名目を取り、その代わりに宋は遼に毎年絹 20 万疋、銀 10 万両を歳幣<sup>さいへい</sup>として送るというものだった。金で平和を贖ったと評判はあまり芳しくなく、遼は何かと歳幣の引き上げを要求してきたのだが、平和が維持されたことは宋、遼両国にとって歳幣の額以上の経済効果をもたらした。一方、西の夏国は小さな国であったが、宋が弱体であるのを見て、国を傾けて無謀な戦争を仕掛けてきた。第 1 章の最初に見た退役軍人の<sup>かくりん</sup>郭<sup>かく</sup>綸<sup>りん</sup>が戦ったのは夏国との戦闘であった。宋はかろうじて夏国の侵攻を食い止め、例によって歳幣で平和を実現しようとしたが、夏国はたえず不穏な動きを見せ、宋は国境に常に大軍を配備しておかなければならなくなった。それは宋にとって歳幣どころではない財政負担となった。(5) 武官が文官の下に置かれたことから、軍の志気は低く、軍律は緩く、国や民に対して害をなす兵士が少なからずいた。後に『水滸伝』の<sup>すいこでん</sup>主人公となった宋江<sup>そうこう</sup>が反乱を起こしたのは蘇軾の死から 20 年後であったが、民衆は宋江の反乱軍よりも正規軍の方をより恐れた。(6) 蘇軾がここで主張した民衆に軍事訓練を施して国防と治安に当たらせるという考えは共有する者が多くいた。後に王安<sup>おうあん</sup>石<sup>せき</sup>が主導する国政の大改革で「保甲法」<sup>ほこう</sup>として実施されるようになる。(7) 蘇軾が自分のことを「臣」と称しているのは、この論文が制科に応じて皇帝に提出したものである。科挙も制科も最終的に合格を決めるのは皇帝である。蘇軾にしても唐やそれ以前の時代であれば、官僚になれる可能性は極めて低かったので、科挙に合格させて

くれた皇帝に強い感謝の念を抱いた。そのことから宋代の士大夫のほとんどが驚くばかりの忠誠心の持ち主であった。(7) 先の「留侯論」で大きなことをするには忍耐が肝要であると蘇軾は説いた。この「教戦守策」を書いたころの蘇軾は、(父の影響を受けて) 遼国や夏国に対して強硬な姿勢で向き合うべきだと考えていたようだが、後に戦争は極力回避すべきだと主張し、「留侯論」と整合性が取れるようになる)

■辛丑十一月十九日既与子由別於鄭州西門之外馬上賦詩一篇寄之  
蘇軾と弟は 50 篇の論文による一次審査を通り、二次審査（出題された六つのテーマに対して論文を書いた）も通って、皇帝自身が出題する課題に論文で答える最終審査へと進み、3人の合格者の中に2人揃って入った。蘇軾は3等、弟は4等との評価を受けた。5段階中の評価でありながら慣例として1等、2等は付けないので、呉育実質的に3等が最高の成績であった。宋代を通して3等で制科を合格したのは蘇軾を含めて4人しかいない(母の墓誌銘には呉育に次いで2人目と記されていた(第1章72ページ))。こうして、蘇軾は国からエリート中のエリートであると認定されたのだ。

(制科に合格した頃の気分を、後にある人に宛てた手紙の中で蘇軾は次のように記している。やや誇張はあるものの、意気盛んであったことは確かであろう。

……私は少年のとき、書物を読み文章を作るのは専ら科挙に応じるためであった。すでに科挙に合格すると、地位を貪り、より高位を求めようになり、次に制科を受験するよう勧められた。当

時の自分に果たしてどれだけのものがあったのだろうか。そのときの制科は「直言極諫」という名目であったので、ならばそれにふさわしい論文を書くことと意気込み、古今の歴史をみわたして論を組み立て、是か非かを検討して、筆を執った。人は自分が世間から認められないのを苦しむ。私は制科にも合格したので、自分はしかるべき論を書いた上で、世間に知られたと思ってしまったのだ。それ以来今に至るまで人と争うようにしてたくさんのことを述べてきた。……)

制科に合格した蘇軾は、先に授かって辞退した官職とは大いに異なり、簽書鳳翔府判官事、つまり鳳翔府という地方の重要な行政区の知事の補佐役を職務として与えられた。鳳翔は都から見ると遙か西にあり、蘇軾は嘉祐6 (1061) 年 11 月に都を発った。都の門の外で弟と別れ、馬上でこの詩を詠み、弟に送った。弟は独り身の父の世話をするために官職には就かず、都に残った。

(弟の蘇轍が制科の試験で書いた論文の中に現在の政治を誇る文言があるとして、朝廷のとある高官が立腹して蘇轍を官職に就けることに疑義をはしはさみ、そうなら任官などするものかと蘇轍が拒絶したともいわれる)。

蘇軾は詩題において弟をいうときにはその字の子由を用いている(ちなみに蘇軾の字は子瞻である)。

酒に酔ったかのような、

ゆらゆらするこの感覚。

僕の心はふわふわと抜けて、

君の馬に追いつかろうとする。

君と一緒に父上のもとへと戻って行けない僕は、

置きどころを失ったこの心を、

誰と慰め合ったらよいのだろうか。

酔いの醒めぬままに坂を登り、

とうとうここで振り返る。

波打つ丘が広がる。

際立って背の高い君のことだから、

黒い帽子が丘の高低の間に上下するのが見えるのではなからうか。

寒さが身に染みるようになったこの時季に、

薄い衣でやせ馬にまたがる君の姿を、

僕はいつまでも探し求める。

同道する者が言う。

「道を行く人々は誰もが楽しげに歌い、

家の内にいる人々は誰もが楽しげに話しているではありませんか。

どうして若旦那だけが苦しげなのですか」

僕は酔いから引っ張り出され、

「人生に別れは必然だ。

ただそれだけのことなのだよ」

悲しみは僕だけにあるのではなく、

楽しみはほかの人々だけにあるのではない。

すくにもう一つの必然を僕は思う。

歳月とはたちまち去ってしまうものだ。

君と二人、

夜の雨をしみじみ耳にしながら、

としが 灯のもとで今を昔と語り合うようなときが、

必ずあると、思っ**て**よいのかい……。

このことをわか**っ**てく**れ**ているのならば、

君も高位高官に昇ろうとは決して強く望んだり**は**しないはずだ。

(兄弟が受験勉強をしていたときに、弟は唐の韋応物の詩を示して、「試験が終わればきつと別々の任地に赴かなくてはならなくなるわけですが、必ずまたこの詩にあるように『夜の雨をしみじみ耳にしながら語り合う』ことをしましょう」と言った。以来、兄弟は離れ離れになるたびに「夜雨対牀」(雨の夜に牀を並べて一緒に眠る)の日がまたくることを待ちわびるようになった)

(この詩の訳の後半は「同道する者」とは馬正卿であるとの解釈に基づく。馬正卿は都の太学たいがくで学び、科挙を目指していた。極めて個性的な学生がいるとの噂に、蘇軾は制科の受験勉強中に会いに行った。馬正卿は何か思うところがあったのだろう、学生の身分を捨て、鳳翔に向かう蘇軾に付いて行くことにした。蘇軾と馬正卿は同じ年齢で、形の上では主人と従者ということになったが、友人に近い関係であったようだ)

## ■和子由澗池懷旧

鳳翔に向かう途中で澗池<sup>めんち</sup>という町に着くと、弟からの手紙が先回りしていた。それには「澗池<sup>めんち</sup>の旧<sup>むかし</sup>を懐<sup>おも</sup>う」と題する詩が添えられていた。その詩に和<sup>お</sup>して（同じ韻を用いて詩を作ること）、弟に送った。

この世にあまねく存在する人生なるものは、

何に似ているだろうか。

大空を飛ぶ雁がふわりと降りて、

融けた雪にちょこんと付ける足跡にも似ていようか。

泥の上に爪の痕が残っても、

雁は西に飛んで行ったのやら東に飛んで行ったのやら、

見当を付けることさえできない。

あるとき澗池の寺にいた老僧は、雁が飛ぶようにこの世を去り、

真新しい墓だけが遺された。

僧坊の壁は崩れ、かつて題した詩を見ることもできない。

あるとき僕等の前にあったのは、

長く遠く遙かな道だった。

折悪しくも、乗ってきた馬に死なれ、

かろうじて貧弱な驢馬を手に入れたものの、

その嘶きはまことにわびしげに聞こえたのだった。

（詩の中で「あのとき」といっているのは、5年前に父に連れられて都に上ったときのこと。科挙を受験するための上京（第1章62ページ）で、科挙に合格するか否かで兄弟の未来はまるで違うものになるのだった）

### ■次韻和劉京兆石林亭之作石本唐苑中物散流民間劉購得之

鳳翔の手前で、唐の時代の都であった長安<sup>ちやうあん</sup>にしばらく滞在した。制科に兄弟揃って合格するという快挙を成し遂げた蘇軾はすでにちょっとした有名人で、知事の劉敞<sup>りゅうしょう</sup>を初めとして多くの人々に歓待された。この詩は知事の庭にある石林亭<sup>せきりんてい</sup>で詠んだもの。そこには知事の趣味で集められた唐代の庭石があった。

かつての都は日々に荒廃し、

往時に還ることはもはやない。

やんごとなき方々の庭に置かれていた石は散り散りになり、

人間界の塵に埋もれた。

ここに一人の好事家いて、

石の重さも道の遠さも厭わずに石林亭へと曳いてきた。

ある石は氷雪に削られた顔をしかめ、

ある石は痩せ細った肩をそびらかし、

ある石は青々と水がしたたるかのようだ。

唐の世に、奇石を好んだある人が、  
石に等級を設けて刻印した。  
ここにあるのはさだめし最上級のものばかりだ。  
思えば、これらの石は、  
ある人が失えばある人が得て、  
集まっては散じ、散じては集まり、  
いつまでもいつまでも循環を繰り返して、  
結局のところ環の外に出ることはないのだろうか。  
人間界もまた変転を繰り返す。  
自然の要害に守られたこの地に、  
漢の都も唐の都も置かれ、  
王朝は隆盛を極め、そして滅び去った。  
これらの石はかなり重いものがあるとはいえ、  
山に比べたら羽根のような軽さだ。  
転々とし続けるのもやむをえないのだろうか。  
酒を酌んで石に向かって問いかけようとしたものの、  
答えの出ないような問題は、  
そっくり放り出すのがよいと思うのだった。

## ■鳳翔八観

鳳翔に着任すると、すぐにその地の文物を見て歩き、『鳳翔八観』<sup>ほうしょうはつかん</sup>という8首連作の詩を詠んだ。これは、満身の力を注いだ作品で、これによって詩人としての名が一躍天下に鳴り轟いた。8首から7首を訳す。

(原詩は己の才を誇るかのように(恐らく当人は特に意識はしていなかったのだろうけれど、凡才にはそう見えてしまう)、晦渋にして含意に富んだ高いレベルの語句を縦横に駆使している。訳詩では無頓着に平易で軽々しい語句に移し替えている)

### せきこ 石鼓の歌

季節は冬、月は十二、年<sup>かのどうし</sup>は辛丑。

政治に携わるようになったばかりの私は、鳳翔の孔子廟に詣でた。

昔から聞いていた石鼓がここにあり、

いま初めて見ると、

蛇がじくじく走りまわった痕のようなものがついている。

じっと観察し、指を使って腹の上でそっくりになぞってみる。

それを読み上げようとして、

唇が貼り合わされたかのように何も言うことができない。

唐<sup>かん</sup>の韓愈<sup>いんこえ</sup>は古を好み、この石鼓を見て、自分は生まれるのが遅かったと嘆いた。

それから二百年以上も経ったいま、

当てずっぽうに点や線、偏<sup>へん</sup>や旁<sup>つくり</sup>を見つけようとして、  
一つか二つだけなら、それかどわかるような気にもなるうか。

これまでに解説されたのは、

「ワシノ車ハツヨイゾヨ、ワシノ馬モツヨイゾヨ、  
魚ハコトソレ、柳ノ小枝デソラヌクゾ」

残りの八つか九つはほとんどわからない。

太古の青銅器の破片がごろごろするなかから、  
どうにか見分けられるのは鼎<sup>かなえ</sup>の脚だけであったり、

天上界に細かに散らばる星のなかから、

どうにか見分けられるのは北斗だけであったり、

イボやらタコやらカサブタやらがくちやくちやになったなかから、

どうにか見分けられるのは肘やら膝だけであったりで、

つまりは、雲や霧の向こうに月を、

あるいは、雑草がぼうぼう生い茂る野原に一本だけの稲を、

見出そうとするようなものだ。

石鼓は百回の戦火をくぐり抜け、

かつては文字を発明した伝説の人たちと語り合いもし、

名書家とされた人たちを教え導いたりもしたのだが、

千年の間にただ一人ぼっちになって、

もはや友とする相手はいなくなってしまった。

回顧すれば、遠い昔、乱れた政治に人々はほとんど愛想をつかし、

聖王、賢臣の出現を待ち望んだときに、

天は周の宣王とその老臣を生んで、天下を立て直させた。

東方では虎のような猛将が争いを鎮め、

北方では犬のように諸民族が素直になつた。

宮殿には白い狼や白い虎が次々に献上され、

功臣が並んで参内するとたくさんの恩賞が与えられた。

勇ましく太鼓が打ち鳴らされ、将軍に耳目が集まり、

雅な音楽を奏して歌おうと思った者はいなかったのだが、

どのようなわけかは知れず、

宣王を讃える「鴻雁の歌」が流れてきたのだった。

その歌が石鼓に刻まれたのだろうか。

それまではおたまじゃくしのような形をしていた文字が、

そのときに改められたのだろう。

宣王の勲は偉大であるのに、石鼓にはあえて誇るようなところがない。

周の文王から遠くないこのころには、

奥ゆかしい真心がなお伝わっていたのだろう。

刻まれた年を示すような字を探そうとしてもないし、

まして、刻んだ人の名は記されるはずもなかった。

その後、周が衰えると、

七つの国が競い合った末に、秦が天下を手にした。

始皇帝は儒学の經典を放り投げさせ、

民衆に法律だけを学ばせ、

先祖を祀るための道具は片付けられ、

刑罰に使う鞭や手かせ、足かせの類が並べられた。

始皇帝を補佐したのは李斯という人物で、

始皇帝が山に登るたびに、功業を讃える文章を作って石に刻ませた。

「皇帝ハ四方ノ国ヲ巡ッテ凶暴ヲ連中ヲ滅ボシテ人民ヲ救ツタ」

そのような手放しの賛美は前にも後にもないことだった。

始皇帝によって儒家の經典は焼かれ、石鼓も砕かれそうになった。

周が滅んだときに、王者の徳の象徴とされた九鼎は川に沈んだ。

始皇帝は万人を使ってそれを掘り出して自分のものにしようとした。

暴君は己の欲望を満たすために人民の力を使い尽したけれど、

神聖な九鼎は秦に汚されることはなかった。

石鼓はどこで始皇帝の横暴から逃れたのだろうか。

天が鬼神を遣わして守ったのだろうか。

世の興亡は百変し、富貴はつかの間でしかない。

物質それ自体は変化を免れ、名というものは朽ちることはない。

物の道理をよくよく考え、

人生の長さが石鼓の寿命とは比べようもないのを思って、

私は深く嘆息するのだった。

(石鼓とは、高さが2尺、直径が1尺ほどの加工された花崗岩で、鳳翔近郊の野原に10個ころがっているのが唐の時代の初めに発見された。表面にごく古い形態の文字が刻まれていて、古代の文化を知る貴重な物として大切に扱われ、現在は北京の故宫博物院に第一級の文化遺産として保管されている。この石鼓に関しては唐の時代に韓愈かんゆが詠んだ「石鼓の歌」があり、その著名な作品に26歳の蘇軾が果敢にも挑んだのである)

おうい　ごどうげん  
王維と呉道玄の画

呉道玄の画が鳳翔のどこにあるかと尋ねると、

ふもん　かいげん  
普門寺と開元寺だとの答えが返ってきた。

開元寺の東塔には王維の画もあるという。

画において呉道玄と王維に優る者はいないと常々考えていた私は、  
それで開元寺を訪れた。

まず呉道玄の画を見たところ、

雄々しくも奔放で、海の波が翻るかのようだった。

呉道玄が手を下すと、

筆がまだ到る前から、風雨が迫り、その勢いに万物が吞まれてしまうのだ。

呉道玄が描いたのは、

高く林が繁るなかへと朝日がさしこみ、

釈迦がまさに涅槃ねはんに入ろうとしている場面。

菩薩たちは泣き、

衆人は手をこまねき、

千万の異界の者が悲嘆にくれている。

次に王維の画を見たところ、

その人の詩が気品ある香りをただよわせるのと同じく、

清らかで、のびやかであった。

画かれた釈迦の十人の弟子は、みな鶴のように痩せ、

そこに宿る心は火の消えた灰のように静まり返っている。

ふた群れの竹があり、

雪から現れ出たかのような根や節と、

乱れ動く無数の葉が描かれていて、

その葉のすべてに葉の本質を見てとることができる。

呉道玄の作品は絶妙で、

画に巧みであるという観点からその画を論じることができるだろう。

王維の作品は形の外から得た画で、

仙界の鳥が自由に飛びまわるかのようだ。

二人ともに神技であるのだが、

王維に関しては画を論じるのをやめて、

口を閉ざすしかない。

(呉道玄も王維も唐の時代に優れた画を描いた。この詩においては、王維の方をより高く評価しているが、別の詩では呉道玄が唐代一であるといっている。また本章の最初に掲げた詩にあるように、<sup>えんりつほん</sup>閻立本も唐代の画家として著名で、呉道玄も王維もその後輩である)

唐の楊<sup>ようけいし</sup>惠之が作った維<sup>ゆい</sup>摩<sup>ま</sup>詰<sup>きつ</sup>の塑像

荘<sup>そうじ</sup>子<sup>し</sup>によると、子<sup>し</sup>祀<sup>き</sup>、子<sup>し</sup>輿<sup>よ</sup>、子<sup>し</sup>犁<sup>り</sup>、子<sup>し</sup>来<sup>らい</sup>の四人は、

「頭<sup>む</sup>が無で、背<sup>せい</sup>が生で、尻<sup>しり</sup>が死という者がいたら友だちになりたいものだ」と、いつも笑って言い合っていた。

あるとき子輿が病気になる、子祀が見舞いに行くと、

子輿はひよろひよると歩み出てきて、水辺に立って自分の姿を映し見た。

子輿の肩は頭のとっぺんよりも上にそびえあがり、

背中は大きく湾曲し、顎は臍の下に隠れていた。

そのありさまはかつて笑い合っていたものに近かった。

子輿は言った。

「造物者は私をどうしたいのだろうか」

子祀は言った。

「君をそんなふうにした造物者を憎んでいるのかい」

「自分の体がこれよりもっと変わったところでそれはそれまでのこと。

どうして天を憎んだりしようか」

楊恵之の維摩詰像は、  
亀のごつごつとした骨格をからからに干したかのようで、  
あたかも子輿を思わせる奇怪さだ。  
子輿も維摩詰も、  
つまりは道の奥深くに達した至人<sup>しじふ</sup>で、  
自分の体の変化など浮き雲が移り行くのと同じと見て、  
生とか死とかの境界を超えたところにいたのだろう。  
世の中には、堂々した身体を備え、  
病ということではないのに、  
心を疲れさせてしまっている者が少なくない。  
維摩詰は精神が完全な状態にあって、  
千人の猛者がかかってきても笑いながら退けた。  
ある人が、いかなる法をもってそうであるのかと尋ねると、  
維摩詰は首を垂れたまま言葉を発しなかった。  
問うた人は心の内で了解した。  
そのときと変わらずに、維摩詰の像はいま言葉を発しない。  
村の爺さん婆さんはこんな古びた像には目をくれず、  
野鼠が髭をかじったりもする。  
本来なら、この像の前で大悟するはずであるのに、  
無言の師弟となろうとする者はいまいないのである。

(第1章 39 ページで見たように、蘇軾は少年の頃から道教の經典に馴染んでいた。そのため、道教の哲学的道具を用いて仏教の教義に接近しようとする傾向がかなりあり、そのことがこの詩にもよく表れている)

とうこ  
東湖

私は蜀江しよくこうのほどりに生まれ、  
清らかな川は藍よりも青く澄んでいた。  
いま塵で濁ったこの世間を走りまわって、  
耐えられない思いになることもある。  
岐山きざんのふもとのここの風光ときたらどうだろうか。  
山はあっても赤く禿げあがり、  
川はあっても白いとき汁のようだ。  
たまたま町の東に足をのばし、  
ふと門をぐってみたところ、  
その先が何やら奥ゆかしい雰囲気に包まれていて、  
小さな湖があった。  
この水だけは澄んで故郷を想わせ、うっとり夢見心地になった。  
水の源は山の高いところにあり、  
波を立てて走り、地をひたして走り、  
東の丘にぶつかって、

ことごとくこの湖に呑み込まれるのである。  
 そのありさまは、青い竜が山に寝そべって、  
 清く甘い水を湖に吐き出していると見ることもできようか。  
 いずれここに蓮の花が開く季節になったら、  
 タベの涼を求めて舟を出し、  
 ざわざわと蓮の葉を分けて湖の中心へと入ってみよう。  
 葉が風に翻り、遠くも近くもわからず、  
 世間とのつながりをすっかり忘れて、  
 ゆったり息つくことができようか。  
 たちまち晴れて、たちまち雨が降り、  
 水の深いところには魚や亀、  
 水の浅いところには巻貝や二枚貝、  
 それこそようよふ浮いたり沈んだり、  
 餌をやるまでもなく、糸を垂らすまでもなく、  
 すぐさま籠がいっぱいになるまで採れるであろうか。  
 聞くところでは、昔むかし周の世が始まったときに、  
 青いおおとり鳳が岐山に棲みつき、この池に飛んできて水を飲み、  
 いろとり豊かな己の姿を湖面に映したという。  
 鳳が好むあおざり梧桐がいまもここにあり、  
 樹の太さは一千年のよわい齡があるかのような。

いまは鳳の姿はなく、鷹やら鶉やらを見るだけだ。

私は遅く生まれ過ぎたのか。

鳳について記した古いにしよの書物は時の彼方にぼんやりとかすんでしまった。

それでも、私は古こころの意を好んでここに遊び、

鳳の詩を古の人のように詠んでみたいと思う。

ここ鳳翔は長安を守る三つの町の一つだった。

湖のほとり飲んで、酔って歴史を談じてみようか。

鳳はおそらくこのころの王朝の興亡などには関心がないだろう。

もとの門にもどると、

道行く人はここで馬を止めることなくひたすら通り過ぎて行く。

どのような用事に追われて、

湖に目を向けようもしないのか。

私がいまここでこうしているのは、

幸いにも知事がおおらかに見てくださるからだ。

ならば、一日に二度ずつここにきて、

そのまま三年の任期を満たしてしまおうか。

暮れ方の鐘や太鼓の響きを聞きながら、

連日、千鳥足で町へと帰って行くのだ。

(このときの鳳翔府の知事は宋選そうせんで、才気溢れる蘇軾を(この詩では誇張されているが)かなり厚遇した)

しんこう

## 真興寺の高閣

真興寺の高閣に登る。

遠くの山や川も、近くの町並みも、

ぼんやりとしたひとつの形に溶け込み、

上を飛ぶ鳥の声も、下を行く人の声も、

ほのかなひとつの響きに溶け込んでいる。

ここの高さはどれほどであるのか。

背を伸ばして落ちる日を見送った後で、

手を伸ばせば流れ星をすくい取れるだろうか。

この閣は誰が作ったのか。

南の山から木を切り出して、

すっかり赤禿山にしてしまったのが王彦超おうげんちょうだ。

王彦超の往時の姿を写し取った画がこの閣にある。

黒い鉄のような顔面、

切れ上がった眼差し、

身の丈はさながらこの高閣と競うかのようにであった。

昔の人は横暴をほいままにし、

今の人を驚かせる大きな事業を成し遂げた。

この閣は昇るだけでも息が切れて苦しいのに、

建設に携わった人々の労苦はさぞや耐え難かったであろう。

さあ、この高閣を見るがよい。

作った人は果たして勇者にして英邁であったのか。

(王彦超は五代十国時代の終わりから宋の初めにかけて地方の実力者として鳳翔に君臨した。この詩から、大規模な建築が山の自然を破壊する原因になっていると、蘇軾は認識していたことがわかる)

り も て い  
李茂貞の庭園

朝のうちに馬にまたがって町の北へと行く。

東に向きを転じると、

青々とした竹が高く伸び上がり、

その下に赤い門がある。

壊れかけた塀に囲まれた古い家だ。

鞭を挙げて扉を軽く叩くと、

静かな音が谷間にこだまする。

馬より降り、門から十歩ばかり進む間に、

早くも九回は目を向けて見るべきものがある。

いろいろな花が四方に咲き乱れ、

百種の鳥がさえずり合っている。

谷の水が西から引かれ、塀際を音を立てて巡り、東の林へと入って行く。

その奥に緑に包まれた窓が見える。

竹と水は清らかさを競うかのようで、

その間に一羽の鷺が立っている。

ひとかかえ百尺もあろうかという松の巨木があり、

その幹に歳久しく経た青い鱗が縮こまっている。

これほどの松はこのあたりに珍しく、

長安周辺でこれ一本であるのかもしれない。

橋を渡って流れの南に行くと、

道の左右に高い木が多くあり、

日の光が淡くさえぎられ、

りん凍とした空気が蓄えられている。

東の四角い池では、野生の鳥と飼われている鳥が入り混じっている。

私は問いかける。

「この庭園は誰が築いたのですか」

「その昔、李將軍が世の衰えに乗じてこの地で威を張り、

民衆からさまざまに口実で税を徴収し、

課税を免れたのは、一杯の粥、一杯の汁だけで、

耕作地を取り上げてこの庭園を築いたのです。

なりわい生業を失った人々は、

李將軍が怖くて泣くことさえできませんでした。

いまでは鳳翔に名高いこの大庭園も、  
このために破滅した家は千を数えたのです。  
勇<sup>いくさ</sup>壯を誇った李將軍の戦衣にはいまでは風がわき、  
ここで飲んだ美酒はむなく消え、  
李將軍は我々からその名を呼び捨てにされ、  
冷笑されるだけとなりました」

この地に来た私は、李將軍と違い、吹けば飛ぶような小役人だ。  
それが李將軍の庭でふらふらと遊んでいられるのだから、  
人生というものはどうなるかわからない。  
李將軍のような力などはないこの私でも、  
後世の人から笑われるという点においては、  
李將軍と同じということになってしまいかねない。  
ともあれ、今日のところはこの風光を楽しむのでよしとしようか。

(李茂貞は、王彦超より前に、唐の末期から五代十国時代の初めにかけて鳳翔を本拠地とした軍閥の長であった)

### 秦の穆公ぼくこうの墓

町の東の一角にちょっとした滝があり、  
そのかわりに千五百年前の秦の穆公のたとされる小さな墓がある。  
当時はここに町はなく、

昔の人は滝を目印に墓を訪れたのだろう。

穆公が死んだ後で、特に優れた三人の重臣が殉死した。

人々は三人を失って深く悲しみ、それから国は病み疲れてしまった。

だから、穆公は後始末をきちんとしておかなかった愚かな君主だったと、  
歴史家からは批判された。

だが、穆公はかつて敗軍の将を罰しなかった。

戦に敗れたのは、自分が欲深く領土の拡大を求めたからで、  
將軍のせいではないとして、  
その才能を惜しんで起用し続けた。

そのことを思えば、

有用な人物を冥途の旅の道連れにするようなことを、  
穆公は望んだりしたのだろうか。

三人はそれぞれの気持ちから殉死したので、  
誰も止められなかったのだろう。

昔々の人々は、たった一回の食事の恩でも、  
意気を感じると己の身を殺すことも厭わなかった。

いまはむろんそのような人を見ない。

いま見ないから、昔もいなかったはずだと、疑ってはいけけない。

遠い昔の人には会うことができない。

だから、いまの人は古の人の心が理解できない。

そのことを私はただ傷むばかりである。

(蘇軾は詩歌においてもしばしば史論を展開し、世の定説に異論をさしはさむのを好んだ)

## ■次韻子由除日見寄

年末に弟が送ってきた詩に次韻じいん(同じ韻字を用いて詩を作る、和すと同じ)した詩。

しかない役人としての仕事が僕を西へと駆り立てたとき、

君と遠く別れるのがさほどまで惜まれたわけではなかった。

いまになって、この次に会えるのが遠いことが憂わしくてならず、

一年が終わり行くのを惜しむ心のゆとりはない。

酒を酌んで強いて楽しもうとしても、

このあたりのご馳走は羊のスープに熊の干し肉とかで、

飲んでも食べても、気分は冷や冷やとしたままだ。

子どものころの年越しがしきりに思い出される。

指折り数えると、すでにとっくの昔だ。

行ってしまったことは、放った矢と同じ、

いまさら追いかけられるものではない。

あれから得たものは、あれから失ったものを償ってくれない。

時の推移に感じ、事の変化を嘆くばかりだ。

そんなことを思っていたら、

役場の年老いた小間使いがやってきて、

「鬼やらいをやんべえよ」と言い、

その豊饒かしくとしたありさまに驚かされた。

もしかして、いまのこの愁いが鬼の仕業であるのなら、

ひとつこは小間使いを煩わして、

厄払いをしてもらうのがいいのだろう。

寒く凍てつくいまに、

梅や杏の枝を手にとってみると、

小さな幼い芽は麦粒くらいしかなく、

花はいつ開くとも知れない。

華やかな春の到来が遅いと嘆いてはいけない。

春の次には夏がきて、幼いころは過去となって、

花の終わった後にはもはや顧みられなくなってしまうであろう。

人生はただ楽しむべきだと、古いにしの人が言った。

名声などどうでもよいではないか、とも言った。

どうして僕はこうも多くのことを感じ、

身を焦がさなければならないのか。

油が、油であるが故に我が身を炙あぶらなければならないのと同じなのだろうか。

君の詩がきて、

遠くから僕の心を言い当ててくれ、

胸の内をゆるやかにしてくれた。

まざまざと君の顔を見るような気がして、

すぐそこに君がきているのではないかと疑われた。

兄はちつとけな役人になったばかりだが、

かたじけなくも知事をお手伝いする仕事をいただいている。

知事のご厚意で官舎の北側に池を掘ることになり、

川から青い水を引いてくるつもりだ。

いずれはその池に臨んで酒を飲みつつ、

ゆったりと日を送るようなこともできるであろう。

君の詩に和して詠み始めてみたけれど、

僕の詩は力が弱く、君の詩と競ったならば、

負けた罰として首をちょん切られてしまうことだろう。

君の詩は作られて十日でここに着いた。

これから一カ月に一篇の詩を寄せ合うのなら、

千里の距離など何でもなく、

憂愁を軽く擲<sup>なげ</sup>ってくれることだろう。

(ここに宣言した通り、鳳翔と都の間で兄弟の詩が多数行き来し、後に一つの詩集として編まれた)

■壬寅二月有詔令郡吏分往属県減決囚禁十三日受命出府至宝雞號郿整屋四県既畢事因朝謁太平宮而宿於南溪溪堂遂並南山而西至樓觀大秦寺延生觀仙遊潭十九日酒帰作詩五百言以記凡所経歴者寄子由

かゆう  
嘉祐7（1062）年、蘇軾、27歳。

この詩には非常に長いタイトルが付けられている。要約すると、蘇軾は全土に発せられた皇帝の指令を受けて、2月13日に鳳翔を発ち、近隣の4県を巡って任務を果たし、2月19日に帰った。その間に見聞したことを500字の詩にして弟に送った。日付が明示されているのは、それだけ素早く回って官僚として精力的に働いたことを強調する意があるのだろう。若い蘇軾は、過密スケジュールの中でも見るべきものは見て長編の詩をまとめたのだが、ここでは蜀の英雄である諸葛孔明しょかつこうめいに関連するところだけを訳す。

夕暮れの迫るころに小さな集落に着くと、  
あれが諸葛孔明の石鼻城せいびじょうだと聞かされ、  
その高みへと登った。  
足もとは切り立った絶壁、  
その下を奔流が洗い、遠くへと走り去る。  
諸葛孔明はここにまで遠征し、

二十日余り戦ったものの退却した。

いまの平和な時代にここで戦を交える国はなく、  
道を行く旅人は先を急いでせわしない。

北からきた人はここで初めて険しい山に入り、  
南からきた人はここでようやく山から解放される。

山ははるか南のだいさんかん大散関へと連なり、  
わが故郷への帰路がそこにある。

行こうとしても行けないのか。

行こうとしなければ行けるのか。

帰るためにはまだしばらくここに留まらなければならないのだろう。

道を下り、ぼんやりとした月が浮かぶ夕空のもと、  
心に愁いを抱きつつ、ほとぼる川を渡った。

宿に着き、そして真夜中。

人々が呼ぶ声に驚いて飛び出た。

真赤に燃える火のようなものが虚空に浮かび、  
どこに天があるのかわからなかった。

にわかに強い風が吹き、いつまでもおさまらなかった。

明けて、山がちの道に入ると、

水がさらさらと流れ、川辺に竹が繁り、

これまでと風光が一変した。

## ■鳳翔太白山祈雨祝文

鳳翔周辺では前の年から極端に雨が少なく、旱魃が危惧され、宋知事はしばしば雨乞いを行った。蘇軾は先の出張中に、たいはくざん太白山の神はすこぶる靈驗があると聞いていたので、自ら志願して太白山に登って雨を祈った。これはそのときに山の神に捧げた文。

太白山の神に申し上げる。

西方の英偉の気が集まってできたのが太白山である。太白山の潤いの気が集まってできたのがしゅうたん湫潭だ。湫潭の一杯の水があれば天下を潤すに足る雨になるという。ならば鳳翔の地だけなら潤すのはわけないであろう。

さかのぼること去年の春より鳳翔には雨も雪もない。民衆の生命は何にかかっているのか。麦や稲だ。あと十日も雨がなければ今年は凶作となる。食べるものがなければ民衆は盗賊となるよりない。土地を治める知事だけがそのことを憂う役務を負っているのではないはずだ。神は座視していてよろしいのか。

皇帝は神に礼を尽し、民衆は神を崇めてきた。それは何のためであったのか。今日のこのようなときのためではないのか。

神もよくよく考え、皇帝の心に背かず、民衆の望みを断たぬようにすべきであろう。

(神に平身低頭して雨を乞うというものでは全くない。皇帝は天命を得て中国を統治している。その皇帝から民衆を委ねられているのが官僚としての蘇軾の立場であるか

ら、山の神に対して正々堂々とものを言うべきなのである)

(この詩で、「気」が集まって山や池ができたといっている。「気」は中国の自然哲学上の重要な概念で、「物質+エネルギー」と考えてほぼよいのだろう)

## ■真興寺閣栲雨、攬雲篇

蘇軾は太白山の中で雲を掴まえ、それを鳳翔の町に連れて行き、真興寺の高閣(本章36ページ)で放った。そして、空に昇った雲に向かって、知事とともに雨を祈った。すると、間もなく降り出し、雨は3日にわたって続いた。そのことを歌った二つの詩を合成して訳す。

物質が作用するには必ずしかるべき時がある。

知事は星を観て、この日と決めて千騎を従えて町を出た。

私はひとり山へと馬を走らせた。

山の神より一杯の水を拝借し、山中の道を取った。

すると、雲が猛然と我が前に下ってきた。

稲光が走るような、あるいは竜が飛ぶような勢いで迫ってきて、

にわかには散り散りになり、

あるものは野の上の霧となり、

あるものは林の枝にはりつく氷となり、

あるものは私の肘から腿のあたりへとやってきたので、

それをむんずとつかんで籠の内に収めた。  
水と雲とを携えて帰還し、  
待ち構えていた知事とともに、高閣に登って雨を祈った。  
ここぞというときに、籠の封を切って雲を放った。  
もくもくと暗いものが湧き立ち、  
空からいまも雨が生じそうになった。  
冷やかな風がたもとを吹き上げ、  
山へと近づきつつあった西日がかげって光を失った。  
「さあ、雲よ、天へとお帰り、  
そして、雨を降らせておくれ。  
どうか、我が知事がもう心を碎かずにすむように」  
きっと今年の秋は豊かな稔りとなる——  
雨が落ちてきさえすれば、  
民は腹いっぱい米を食べることができるのだ。

## ■喜雨亭記

本章 43 ページの詩にあったように、蘇軾は官舎の裏側の庭を整備し、池のほとりに亭あづまやを建てた。折しも、雨乞いの成果があつて雨が降ったので、その亭を「喜雨亭」と名付け、そのことを記念するこの文章を記した。

雨を亭あずまやの名に入れるのは喜びを記念するためだ。

何かによる喜びがあったときに、そのことをもって物に名を付けるというのは遠い昔からある。喜びを忘れないためだ。事例は数多く、喜びの大小はさまざまであっても、忘れないためにということは共通している。

私は鳳翔にきて年が改まってから官舎の改築を始めた。建物の北に亭を建て、亭の南に池をうがち、水を引き、木を植え、休息の場にしようとした。

春になったばかりのころに、山の北側で空より麦が降った。占いによると、麦は雨の降る形を示し、豊作になるということであった。ところが、それからひと月を越えても雨がまったくなく、民衆は憂い顔になった。三月に入ってやっと一日だけ雨が降り、その九日後にもまた雨が降った。これだけではとても足りないと言った民衆はまだまだ心配し続けた。そして三日後にとうとう大いに雨が降り、三日間続いてから止んだ。

役人は官舎の庭に集まって祝賀し合い、商人は市場に集まって歌い合い、農民は畑に集まって踊り合った。これまでの憂いは楽しさに転じ、病は癒えたのだった。そして私の亭はちょうどこのときに完成したのである。

私は亭において宴を催し、来てくれた客に向かって盃を挙げ、問いかけた。

「あれであと五日も雨がなかったらどうなったでしょうか」

「麦はまったく稔らなくなったでしょう」

「あれであと十日も雨がなかったらどうなったでしょうか」

「稲もまったく稔らなくなっちゃったでしょう」

麦も稔らず稲も稔らなければ飢饉に陥ってしまう。困窮した民衆は争いごとを頻繁に起し、盗賊の勢いがさかんになって、私たちがこの亭に集まって楽しみをなさうとしてもできることではなくなってしまふ。

始めは日照りであったけれども、天はこの民を見捨てず、雨を降らせてくださり、そして我らにこの亭での楽しみ事を与えてくださった。これらはみな天からの賜わりものである。忘れてよいものではない。よって雨をもって亭に名を付けるのである。

そしてこのことを歌おうと思う。

天が<sup>たま</sup>珠を降らせてくれても、

凍える者はそれをまとうことはできず、

天が<sup>ぎよく</sup>玉を降らせてくれても、

飢える者はそれを食べることはできない。

雨が三日も続いてくれたのは、

誰の力のおかげだったのか。

民衆は知事が祈ってくれたおかげだと言いつけれど、

知事は自分ではない皇帝の徳のおかげだとおっしゃる。

皇帝は自分ではない<sup>そうじつしや</sup>造物者のおかげだとおっしゃる。

造物者は自分ではない<sup>たいくう</sup>太空のおかげだとおっしゃる。

太空とは<sup>めいめい</sup>冥冥として名付けようもないものだ。

だが私は名を付けるという行為を亭あずまやにはしたのである。

## ■鳳鳴駅記

蘇軾は公務を帯びて鳳翔周辺にしばしば出掛け、鳳翔の東の扶風ふふう県の駅館ほうめい（鳳鳴駅館）に幾度か泊まった。扶風県知事の胡允文こいんぶんに頼まれ、その駅館について書いた。

（駅館は公の施設で、利用できるのは官人や外国からの使節、それに科挙を受けるために移動する受験生などで、蘇軾は6年前に父に連れられて受験のために上京した際に、扶風県で駅館に泊まろうとしたことがあった。その体験から筆を起こしている）

私は嘉祐元（1056）年に科挙を受験するために扶風県を通過した際に、駅館の管理人に頼んで入れてもらった。しかし、とても泊まれるような状態ではなかったので、すぐに出て、民間の旅館を捜した。それから5年が経って鳳翔府に赴任し、数日後に扶風県の駅館にまたきてみると、泊まる者のための設備が十分に整えられていた。そのありさまは役所のようにあり、立派な廟観びょうかんのようにあり、何代も続く裕福な家のようにあり、四方からここにくる者は我が家に帰ったように楽しく感じ、ここから去りたくないと思うほどで、いざ出発となると、馬もぐずぐずと振り返って嘶くのである。

私は駅館の係員に、この変わりようについて尋ねると、

「今の州知事様が新しくされました。州知事様は嘉祐6（1061）年8月に初めてここ

にお越しになりますと、すぐに改修をお命じになり、木、竹、瓦、釘等が大量に集められ、延べで三万六千人もの人間が動員されましたときには、人々は一体何が始まったのかわかっておりませんでした。五十五日間でこのように完成したのです」

私はそのように聞いて成程と感心した。

その翌年、県知事の胡允文が駅館の前に石を据え、駅館の改修事業について記念の文章を刻もうとし、私に書くよう依頼してきた。私はこれは書き残す意味があると考え、次のように記すものである。

いにしへ古の君子(行政官)は居るべきところを選ばず、どこであっても安らかにしていられた。安らかであれば楽しく、楽しければ喜んで仕事ができ、仕える者も喜んで仕事ができた。こうして天下はよく治まったのである。

後世の君子にはいつも何かしら不満なところがあり、居るべきところにも不満を抱えている。不満があれば落ち着かないか、怠けてしまうかする。落ち着かなければ仕事は乱れるし、怠ければ仕事は進まない。乱れても進まなくても天下はまともには治まらない。こういうことが実際によくあるのだ。

いま宋知事が励み勤んでいることは、ことごとく世の中が必要としているところのものと合致している。官の仕事で何をしているときにも不満なところはない。宋知事は扶風の駅館を見て、誰もがそこで安らかにいられるよう細部に至るまで整えた。そのようにするのは駅館に対してだけでなく、もっと小さなことであっても宋知事は心を尽くさないということはない。

いつも肉を食べている者は野菜だけでは満足できない。いつも錦の衣を着ている者は綿の着物では満足できない。いつも大きく費やすことばかりしている者は小さな費えでは満足できない。これは世の中によくある困ったことである。

「楽しげている君子は民の父母である」

とは昔から言われること。楽しげていることよりも貴いのは、居るところを選ばずに安らかであることではないだろう。安らかであれば楽しく、楽しければ喜んで仕事ができるからだ。

駅館を改修したこと自体は実は書くに足るようなことではない。駅館を改修したことから、宋知事が居るところを選ばずに安らかであること、安らかであれば楽しく、楽しければ喜んで仕事ができるということ、自ら実践し、鳳鳴駅館にくる誰もがそのようにできるようにしたということがわかる。このことこそがまことに書く価値があるのだ。

## ■壬寅重九不預会独遊普門寺僧閣有懷子由

鳳翔での初めての官僚生活は雨乞いの成功に象徴されるようにすこぶる順調にスタートし、「鳳鳴駅記」を見ても宋知事との関係は極めて良好であった。しかし、なぜか役所の中では孤立化し、9月9日の重陽ちようようの節句に宋知事の主催で開かれた酒宴に蘇軾だけが呼ばれなかった。蘇軾は翌日、1人で普門寺ふもんに行き、弟のことを思った。

ここには菊の花が開き、酒は美味であるけれど、  
 南に仰ぐ山の高みはいかにも冷え冷えとして、  
 そのありさまを見るにつけ、  
 どうして郷里に帰らずにいるのだろうかと思ってしまう。  
 僕の心は、南に翔る雁<sup>かけ</sup>とともに飛び去ろうとし、  
 山にかかる雲は、弟を想う僕の涙を降らせようとする。  
 昨日は重陽の宴を楽しむべき日でありながらそれに違<sup>たが</sup>うところがあった。  
 来年のこの日に健やかでいられるとしても人は必ず老いてしまう。  
 その昔、重陽の宴に酔い、帽子が吹き飛ばされても気がつかずにいた人がい  
 た。  
 その人の振る舞いがおかしかったのではない。  
 それを見ていた人が問題だったのだ。  
 陽気に笑えばよいのに、ひそひそ誇<sup>そし</sup>ったのだから。

(超エリートとして鳳翔に赴任してきた蘇軾を宋知事は厚遇し、自由な振る舞いを許  
 していた。それを不快に感じる者が役場の中になかったはずがないと、容易に推測  
 できるであろう。初めのうち、蘇軾はそれに全く気付かなかったために、いつしか摩  
 擦が大きくなったのだろう)

## ■九月二十日微雪懷子由弟二首

秋の深まりとともに蘇軾は心身ともに不調に陥り、しばしば弟を想った。

其の一

天は鳳翔の九月に淡い雪をもたらし、  
早くものさびしい年の暮れの心持ちにさせられる。  
昼間が縮み、  
寒さに備えて砧きねたを打つ音がせわしなく響くなか、  
役目の薄い役人は、事もなく家の奥に引きこもっている。  
君と別れてからの愁いは酒が消してくれているはずだった。  
秋になってから櫛にはしきりと抜けた白髪が付く。  
僕は国境とりでの塞の外の寒さにも耐えるという貂てんの革コートの裘を買ってみた。  
それをまどって、宿場ごとに用意される御用の馬を乗りついて、  
西方の国に宝物を探しに行くというのは、どんなものだろうかと、  
僕はいま真面目に想っているところだ。

其の二

都へと向かう船で、君と箱いっぱいいばいの詩を作った——。  
都の外で君の馬と東西に分かれたとき、涙が胸にしたり落ちた——。  
官人に採用されてから国に報いることはまだ何もできていない。  
書物や剣の前で取じ入らねばならない。  
こんなことならいっそ帰郷してしまおうかと思ひもする。

しかし、同僚たちの手前を畏れないわけにはいかない。

また秋なのに、もう年が暮れてしまうのかと驚くばかりだ。

雪景色を寺の二階から眺めようと思っても、

一緒に登ってくれる人はいない。

兄はいまこんな体たらくだ。

君はきっと東の窓辺に机を置いて『易経』の研究に没頭し、

馬車が止まって門を叩こうが一向に応じようともしないていることだろう。

(蘇軾の父の蘇洵は長年、古代の占いの本である『易経』の研究を続け、弟はそれを手伝っていた。後に蘇軾は2人の研究成果を踏まえて『易伝』という書物を著した)

### ■病中聞子由得告不赴商州三首

蘇軾に遅れることほぼ1年で、弟の赴任先が商州に決まった。蘇軾の言動を嫌う人が朝廷にいて、その任官を巡ってごたごたしていたのが、ようやくおさまって辞令が出されたようだ。しかし、蘇軾はなお釈然としないものがあるとして、父への孝養を理由に辞退した。商州は鳳翔から遠くなく、赴任してくれば弟と会えるかもしれないと、蘇軾は期待していたとこの詩に詠んでいる。

#### 其の一

病のなかで僕は、君が商州にはこないと聞いた。

君と僕が旅する雁のように翼を並べて飛ぶということはこれでなくなった。  
君と別れていることに比べたら、官位の高さなど意味がない。  
君のことばかりを思って、日々の時間がどうしようもなく長い。  
君に暇がたくさんあるのは、書物を著すのにまことによいだろう。  
僕は官職に就いてまだ何の功績もないから、みだりに故郷には帰りにくい。  
世間から隠れるのに最もよい場所が故郷であるとは限らない。  
いま君がいる王城の地こそがよいのかも知れない。  
大海の魚のように万人がうようよしているのだから、一身を隠すのはわけもない。

## 其の二

先ごろ僕は章惇しょうてんと会った。

章惇はまさに商州で官に就いていて、  
商州の人々は君の赴任を待っていると言っていた。  
商州というといつか思い起こすことがある。  
昔この地の帰趨を巡って王様をペテンにかけようとした策略家がいいた。  
君の真直ぐな言説の前では、そんな連中は赤恥じをかいた。  
世の乱れを避けてこの地の山に籠った人がいた。  
以来ここでは俗な凡才は嫌われているということだ。  
この地には独特の方言があり、余所者はやっと名前が通じるくらいだという。  
余計なことは言わないですむのだからまことに結構ではないか。

この地の人には昔から瘤こぶが多くて首と顎の区別もつかないという。  
 上辺のよしあしにまどわされることがないのだからまことに結構だ。  
 君が試験で書いたことがお歴々に気に入られなかったのなら、  
 お上に願って辞退するのではなく、  
 商州にくることこそが君に最もふさわしいのではなからうか。

(この詩にある章惇は、蘇軾と同じ年の科挙で合格した。それを「同年どうねん」という。同年は同窓生に似て、官僚人生において長く親交を結ぶことが多い。蘇軾はこの秋に公務で長安に行って章惇と出会って意気投合し、2人で小旅行もした。弟への手紙に生涯の親友を得たと記した。しかし、後に章惇と蘇軾は厳しく対立する政敵となる)

### 其の三

官職を辞退した君の本意は誰も知らないだろうから、  
 役目が低いのを嫌ったと言いついてる連中が出てくるかもしれない。  
 そんなのはほっておいて、悠々と酒でも飲んでいけばよい。  
 歳月は自然と流れ、髪や髭が自ずと白くなるだけだ。  
 君の答案が誰かの気にさわったのだ、人々から嫌われたのだ、  
 そんなことは憂うに足りない。  
 『易経』を読めば大きな道理が知れるだろう。  
 僕は夢のなかで君を求めてさまよった。  
 互いに心を知るのは僕と君だけなのだ。

■病中大雪数日未嘗起觀號令趙薦以詩相屬戲用其韻答之

11月になってもなお病みがちで、伏せっている間に大雪が降った。たまたま鳳翔を訪れていた趙薦<sup>ちようせん</sup>という近隣の町の知事が雪のために足止めを食らい、気晴らしに宋知事が雪見の宴を催した。趙薦はその席上から病気見舞いの詩を蘇軾に送った。それへの返事。

これで十日も伏せて、  
ひたすら薬と親しくしていたところ、  
どうにもならないほどの寒さを感じた。  
つむじ風が窓を鳴らし、  
寢床を囲む帳<sup>とばり</sup>が巻き上げられた。  
雪が深く積もったとも知らずにいると、  
なんと雪の重みで軒板が落ちたと聞かされた。  
そこに西隣りから歌や音楽が流れてきた。  
寒さをものともせず、  
大雪の中にも立派な道が通じて、人々が続々と集まったのだらう。  
からっぽになった酒の瓶が次々に横に倒され、  
人々の熱気で瓦の上の雪も融けたのではあるまいか。  
私はよい酒に近づきたいと思いはしても、

雪の様子をのぞきに出る気力もない。

いつか夏の暑さのような活気を身の内に取り戻し、  
我が体を働かせたいと思う。

いまは人気のない部屋でひとり憂いに沈んでいても、  
いつかこちらから宴に招くようなことをしてみたいと思う。

昔むかしのこと、

友を呼びたくても毛氈もうせんさえないと嘆いた人がいた。

私のところには売って酒代にするくらいの衣類ならある。

しかし、招いても喜んでもらえるとは限らない。

つらつらそのようなことを思っていると、

寒さがまた一段と厳しくなった。

これは雪が晴れ上がったためかと身を起こすと、

半分の月が西にかかっているのが見えた。

そこに貴公からの詩が届けられた。

旅人はひとり苦吟するものと決まっている。

今夜は黙々と詩を作るのがよいのだろう。

詩人は昔から不遇であるらしく、

秀句は寒さと飢えから生まれ出る。

雪はいつか消えるだろう。

私も病を脱して、昔の詩人の後を追ってみたいものだ。

(この後ぐらいから、役所の同輩との関係は少しずつ改善されて行った。それには妻の助力が大きかったと蘇軾は後に回想している。妻の人間観察眼は鋭く、誰とどのようにつき合うのがよいのか具体的なアドバイスをした。若い蘇軾は、弟以外の家族について詩に詠むことがなく、妻や子については知れることは少ない)

■歳晩相与饋問為饋歳酒食相邀呼為別歳至除夜達旦不眠為守歳蜀之風俗如是余官岐下歳暮思帰而不可得故為此三詩寄子由

年末を迎えて蘇軾は望郷の念を募らせ、故郷での年越し行事を回想し、3篇の詩を作って弟に送った。贈り物をし合うのを「饋<sup>きさい</sup>」、酒食を用意して招き合うのを「別<sup>べっさい</sup>歳」、夜明けまで眠らずにいるのを「守<sup>しゅさい</sup>歳」といい、それぞれについて1首ずつ詠んだ。

### 饋歳

農家は収穫を終えると、  
互いに贈り物をし合って年を越す。  
これを饋歳という。  
あまねく皆に喜びが行き渡らないのを恐れ、  
値段の高下を気にせず市で贈り物を買う。  
山と川とでは産物が異なり、  
巨大な鯉を板に載せて贈るかと思えば、

兎を籠に入れて贈りもする。

貧富によって多い少ないがあり、

金持ちは華美を誇って、光り輝くばかりの刺繍で飾った織物を見せびらかし、

貧乏人は恥じらいながらも、

臼を曳く賃仕事で稼いでほんのちょっとしたものを用意する。

僕は役人仕事でここにきて、

官舎にくすぶったまま歳末を過ごしている。

故郷の饋歳の風習を詩に詠んでみても、

聞いてくれる人は一人もいない。

### 別歳

ゆかりの人が千里の旅に出ようとするとき、

ぐずぐずと別れが惜まれる。

人は行ってもまた帰ってくる。

歳というものは行ってしまったらもう追いかけることすらできない。

「歳よ、君はいったいどこに行ってしまうのか」

「遠く天の涯だ。

大河の水が東へと流れ去り、

海に赴いて帰ることがないのと同じだ」

酒食を用意し、帰ることのない歳と別れるのを別歳という。

東隣りでは、酒がちょうど熟したとふるまい、  
西隣りでは、豚がちょうど肥えたとふるまう。  
一日を大いに楽しんで、  
一年が終わる悲しみを慰め合う。  
今年と別れるのを嘆き過ぎないようにしよう。  
新たにくる歳ともいずれは別れることになるのだから。  
「歳よ、行くなら振り返らなくてよいぞ。  
老いと衰えを君に持って行ってもらいたいから」

### 守歳

まさに終わろうとしている歳とはいかなるものか。  
谷底に赴く大蛇に似ていようか。  
すべての鱗が谷深くに消えようとするときに、  
誰がそれを止められよう。  
尾を引っ張って頑張ってみたところで、  
無益と知るほかはない。  
除夜に朝まで眠らずにいるのを守歳という。  
子供たちも眠るまいと、  
互いに見張ってやかましく夜を過ごす。  
暁を告げる鶏は鳴かずにいてくれ、

時を告げる太鼓は鳴らずにいてくれとも、  
 久しく待つうちに燈火は尽き、  
 北斗七星は斜めに傾いてしまう。  
 夜が明ければ、新しい歳がこないということはない。  
 しかし、新しい歳がきたところで、  
 我が心と我が事には、恐らくはつまずきがあるだろう。  
 せめてこの夜の思いを尽すことに努めたい。  
 まだ歳の内である間なら年若いと誇れるのだから。

(秋以降、蘇軾は初めての挫折感を体験していたのだろう。「我が心と我が事にはつまずきがある」と、来たる年への不安を詩に詠み、それは的中することになる)

## ■和子由踏青

か ゆう  
 嘉祐8 (1063) 年、蘇軾 28 歳。

弟から、前掲の詩の返しとして、故郷での春の始めの行事を詠んだ詩が二つ送られてきた。それに和してまた返した。1 首目は、草が芽生えた野に出て遊ぶ「踏青」を詠んだ。

東からの春風に、道にわずかな塵が舞うと、  
 新しい年の華やかさを楽しもうとする遊び心が湧いてくる。  
 閑があるのなら、路傍で飲むのにちょうどよいし、

麦はまだ短いから、車輪で踏み敷いてしまっても構わない。

町にちんまり籠っているのに飽きた人たちが、

朝早くからがやがやと、

そこらじゅうをからっぽにして出かけて行く。

歌だ、太鼓だと、野山で騒げば、草も木も動こうというもの。

酒だ、料理だと、野原に散らかせば、鳥も鳶もやってこようというもの。

どこの誰やらがいかにめい顔をつくり、

道をさえぎって大きな声を張り上げる。

「さあて、お立会いの皆々さま、

我こそは道を極めた達人であります」

右に左にお符ふだを振り上げ、

「これこそは養蚕によろしいもの。

繭かめを大きな甕かめのようにしますぞ。

これこそは畜産によろしいもの。

羊のろしかを大きな甕かめのようにしますぞ」

道行く人はそんな言葉を信じるわけではないけれど、

新春の縁起かつぎに買っておこうと思案する。

達人はひとわたり銭を稼ぐと、

すぐに酒を買い、酔って倒れて、こう言うのだ。

「ほうらみろ。このお符はこんなにも効き目がある」

## ■和子由蠶市

弟に返した2首目は養蚕に必要な道具類を売る「蠶市」<sup>さんし</sup>について詠んだ。

蜀の人間は、着る物、食う物のためにいつも苦勞している。

蜀の人間は、遊樂に出たら帰ってくることを知らない。

蜀の人間は、千人が田畑で仕事をすれば、

蜀の人間は、万人が遊んで食ってられる。

蜀の人間は、一年中働きづめた。

それでも、春ばかりはのんびりしていて、

養蚕市がにぎにぎしく開かれると、

いつもの辛苦を忘れて大いに楽しもうとする。

去年の霜が降ったところに刈った荻で、

蚕を飼うための簾を編んで今年の市で売る。

糸を繰るための瓢<sup>ひさご</sup>や土釜<sup>つちがま</sup>を作って並べておくと、

金や絹なんかよりも争って買い求められる。

君も僕も童子だった昔は、

勉強をほったらかしにして市へとすっ飛んで行ったものだ。

市の商人は巧みな知恵を働かせ、

その口数の多さに、農家の人々はたいていたまされてしまう。

君の詩がきてそのころを思い出し、  
故郷を離れている悲しさよりも、  
それだけの歳月が流れてしまった悲しさの方が、むしろ大きいのだと知った。

## ■題宝雞峴斯飛閣

前の年のほぼ同じ時期に公務で回った宝雞峴（75 ページの詩題にある）  
を再訪し、そこにある斯飛閣しひかくに登って詠んだ詩。

ここより西南には故郷へと帰って行ける道がある。  
欄干に寄せる我が身から、  
するりと魂が抜け出て、  
寂しげなその道をたどって行こうとする。  
我が魂が飛んで出たら、もう二度と戻ってはこないだろう。  
野はあくまでも広く、天はあくまでも長い。  
牛や馬は雁や鴨とともに空を飛ぶように見え、  
雲の峰は樹木とともに野に生えているように見える。  
山の麓は水の気配を帯び、春の風が麦の苗を揺り動かす。  
農事や漁労に携わらずに、  
官職を愛して軽々しく故国を去り、  
老いの日々まで帰らずに過ごそうとしているのはいったい誰なのか。

## ■重遊終南山由以詩見寄次韻

同じときに終南山しゅうなんざんのあたりにも行ったことを弟への手紙に書くと、それに基づく詩を送ってきた。その詩に次韻した。

去年ここに来たとき、

柳が芽をふいて春の巡りを報じてくれた。

今日ここにくると、

柳の花は緑の苔の上に落ちていた。

川のほとりの堂に一人でまた泊まった。

重ねてここに来るまでに何があったのか。

琴を弾こうとしても、吹きくる風に音が止まってしまう。

杯を手にしても、さしる月の光に酔いが醒めてしまう。

このようなもの憂い僕であるから、

新しい詩を求める君の期待にはしばらく応えられずにいた。

この詩はこれまでの負債を弁じてくれるだろうか。

## ■和子由寒食

現代の日本において春の訪れとともに人々が待ち望むのは満開の桜の下での花見であろう。旧い中国でそれに相当するのが春分から15日目の清明せいめい

せつ  
節で、御馳走を持って一族総出で先祖の墓参りに出かけた。その少し前、  
冬至から 105 日目に寒食節かんしょくせつがあり、その前後は火を使うことが禁じられた。  
弟が寒食について詠んだ詩を送ってきたのでそれに和した。

今年の寒食みそかは二月の晦日だった。

緑深い樹林に春の霞がまといつうようになったので、  
郊外を巡るのによい駿馬を誰かが貸してくれたら、  
意のままにいたるところの名園を見てまわりたいと思った。

とはいえ、何やら物憂いのはそのまま、  
酒は飲むことは飲んでも、杯を重ねるほどでなく、  
詩は作ることは作っても、紙に記すほどでない。

ときに、鴝もずの声がしたのに僕は驚かされた。

鴝という鳥は、七月に、農作業に励めよと人に鳴きかける鳥だ。

季節はずれのその声に、  
故郷の川のほとりの農地が荒れ果てないように、  
いまは誰が耕しているのだろうか、  
僕の心はちくと痛んだ。

## ■客位仮寐

6 月に鳳翔府の知事が交替し、蘇軾を巡る状況が一変した。前の知事の

宋選は蘇軾の才能を高く評価し、官員としての規格に収まりにくいところがあっても穏やかに見守っていた。新たに赴任してきた陳希亮（字はちん きりょう あざな公弼）は全く違った。陳知事は厳格無比で、下級役人（吏人）りじんに手荒く体罰を加え、蘇軾に対しても極めて不寛容な姿勢で臨み、事あるごとに規則と慣習で縛り付けようとした。蘇軾は反発し、陳知事との関係は日に日に悪化し、公務で知事と会おうとしても控室で半日待たされるようなことはざらだった。

知事に会おうと控えて待つ。

いつまでも呼ばれない。

だからといって帰ってしまうわけにもいかないから、

枯れた切り株のようになってじっと座っていよう。

知事は私のいることなど忘れてしまっているのだろう。

だったら私も私のいることを忘れてしまうのがよい。

そうすれば本当の枯れた切り株がここにあるだけとなる。

人々はそうしたことを理解しないので、

ひげをふるわせて私のために怒ってくれもする。

その昔、謝安しやあんが当時権勢を振っていた将軍に会おうとして、

半日待っても呼ばれないことがあった。

一緒にいた王坦之おうたんしがこらえられずに帰ってしまおうとすると、

「ほんのひとときの辛抱と命を引き換えにする気ですか」

そう言って、その後も悠然と待ったという。

私には命の心配まではないのだから、

辛抱するまでもなくただの切り株になっていけばよいのだ。

(知事の交替は蘇軾にとって短期的には大きな打撃となったが、陳知事との軋轢は蘇軾を強くし、長く続いた心身の不調から脱却できた)

## ■陳公弼伝

蘇軾を目の敵にした陳希亮とはどのような人であったのか。十数年後に蘇軾自身が書いた陳希亮の伝記をここで見ておくのがよいであろう。

(この伝記は陳希亮の事跡をかなり細かく記しているので途中を省略する。冒頭にあるよう陳希亮は蘇軾と同郷である(陳希亮の出身地である眉州青神<sup>び せいしん</sup>県は蘇軾の妻の生地である。また、陳希亮の妻は程<sup>てい</sup>氏とあるが、恐らく蘇<sup>そ</sup>旬の妻の程氏と同族であろう)。だからこそ嫌われ役となっても、蘇軾を一人前の官僚にしようと厳しく指導したのであろう)

公<sup>こう</sup>の諱<sup>いみな</sup>は希亮<sup>きりょう</sup>、字<sup>あざな</sup>は公弼<sup>こうひつ</sup>、眉州青神<sup>び しゅうせいしん</sup>の出身。先祖は京兆<sup>けいちょう</sup>の人で、唐の広明年間<sup>こうめい</sup>に初めて眉州に移った。曾祖父<sup>そそうふ</sup>は延禄<sup>えんろく</sup>、祖父<sup>そふ</sup>は瓊<sup>けい</sup>、父<sup>ちち</sup>は顕忠<sup>けんちゅう</sup>、みな官に仕えることはなかった。

公は幼<sup>こ</sup>して父を喪<sup>なく</sup>い、学問<sup>がくもん</sup>を好<sup>この</sup>み、十六歳<sup>じゅうろくさい</sup>のときにきちんとした師<sup>し</sup>について学<sup>まな</sup>び

たいと考えた。公の兄は思案の末に学資として三十万錢余りを公に貸すことにした。公は錢を受け取ると証文を焼き捨て、町を離れて師のもとに入門した。公は学問を習得すると家に帰り、兄の子に学問を教えた。天聖八(1030)年、公は兄の子とともに科挙に合格した。これより町の人<sup>さんしゅんぼう</sup>は公の家のある一角を三雋坊と呼ぶようになった。三人<sup>すじ</sup>の雋れた者がここから出たからだ。

公の最初の任地<sup>ちやうき</sup>は長沙県<sup>かいいんこくし</sup>だった。そこには海印国師という仏僧がいて、土地の貴人たちと交わり、あくどいもつけをしていた。人々は海印国師を恐れ、その顔をまともに見ることもできなかった。公は法をもってその僧を捕え、長沙県の人々は公を畏れた。

次いで雋都<sup>うと</sup>に行くと、そこでは老練な吏人(科挙によらずに地元で採用される下級役人)が錢次第で裁判を左右していた。吏人は公がまだ若い<sup>くみ</sup>のを見て与しやすいと思った。公はいきなりその吏人に重罪を宣告した。吏人は血が流れ出るまで額を地面に打ち付け、「必ず身を改めます」と詫びた。公は教え諭して後に釈放した。公は町の文化水準を高めるために学校を建てた。釈放された吏人は家財を売って学校建設のための資金を提供し、自分の子弟を入学させた。後にみなよい吏人になり、科挙を受けた者もいた。

この地にはたくさん<sup>みいろうじん</sup>のまじない師がいて、春になると鬼を祭るためだと言って民衆から錢を集めていた。民間には、赤い衣を着た火の神様、「緋衣老人」がいるとの言い伝えがあり、まじない師はそれをきちんと祭らないと火災がおこると脅していた。公はその祭りを禁じたが火災はおこらなかった。公は、火の神様以外にもあや

しげな神が祀られている数百の祠を壊し、七十余人のまじない師を追放した。村の老人は「出て行かないでくれ」とまじない師を引き止めようとした。まじない師は泣いて「陳公がわしらを捨てるのだ。わしらがいなくなれば緋衣老人がまた出てくだろう」と言った。

公は、母が老いたので故郷の近くに帰りたいと願い出て蜀の劍州けんしゅうに移り、次いで母が亡くなり、喪のために官職から去った。喪が明けると、都で職を得た。

都の福勝塔ふくしょうたが火事で焼け、国は再建のための費用を用意した。このとき、西方で趙元昊ちやうげんこう（夏国の王）が宋との間に紛争を起こしていたので、その費用は軍の食糧にあてるべきであると公は主張し、塔の再建はとりやめになった。

これより先、趙元昊がまだ宋と事を構える前に、青州の趙禹せい ちやううは、趙元昊はきっと反乱を起こすであろうから警戒するようにと朝廷に申し上げていた。宰相はそのようなでたらめを言うなど、趙禹をよその土地に追放した。趙元昊が実際に反したので、趙禹は上京して「自分は正しいことを言った」と訴えた。宰相は怒って趙禹を獄に下した。公は「趙禹に罪はなく、むしろ称賛すべきです」と、宰相と争った。皇帝は公の主張を認め、趙禹は徐州じゅうに榮転となった。

皇帝はそのような公を見て、官員の罪を裁く御史に抜擢しようとした。たまたま公の外戚の沈氏ちんの子が強盗殺人の疑いで捕えられて獄中に置かれ、まだ己の罪を認めずにいた。公はその者から直接に実情を聞こうとして獄を尋ね、第一問を発すると、その者は恐れあまりその場で死んでしまった。沈氏は公が息子を殺したと訴えた。公および獄の役人が取り調べの対象となった。公は「あの悪者は自分

一人が殺した」と、自ら罪を被って罷免となった。

都の西で盗賊が村を襲って役人を殺した。盗賊の勢いはさかんで、房州が次の標的になりそうだった。富弼ふひつの推薦で公が房州知事に任命された。公が赴任すると、房州には兵備がなく、民衆は盗賊を恐れて次々に逃げ出していた。公は役場の雑役係や民間人や囚人から数百人を集めて日夜軍事訓練を施し、その号令があたりに響いた。それを聞いて民衆は安堵し、盗賊も房州には近づかなかった。

雷甲らいこうという者が朝廷から派遣されてその盗賊の征伐に乗り出した。しかし、雷甲には兵士を統率する力量がなく、兵士は至るところで悪さをした。一方で、別の大盗賊が房州に近づいてきているとの報せが公のもとに入った。公は人々を率いて、その盗賊と川をはさんで対峙した。公は「じっとしたままで動くな」と人々に命じ、一人だけ前に進み出た。新たな盗賊とされていたのは実は雷甲で、雷甲は目の前の相手が盗賊であると誤認して公に向かって矢を放った。公は動かず、ほかの人々もまったく動かなかったので、雷甲は人形ではないかと疑った。馬から降りて様子をさぐり、ようやく公であると知った。雷甲は地に伏し、「官軍であることを知らなかったのです」と詫びた。人々は雷甲を切るべきだと言ったが、公は民に対して暴虐を為した者十余人だけを捕え、その他の者は許し、「盗賊と戦って己の罪を贖え」と雷甲を放った。

ここに党軍子とうぐんしなる賊の勢いがさかんになった。崔德贇さいとくひんがそれを捕えようとして逃がしてしまった。そこで、崔德贇は、党軍子が一度居座ったことのある向氏しょうしという者

の屋敷を囲み、そのの父子三人を殺して、これぞまさしく党軍子であると偽って、その首をさらしものにした。公はまやかしであるの見抜き、崔徳贄を獄に下した。崔徳贄は白状しなかったが、党軍子本人が別のところで捕まった。国は向氏に絹を贈り、その冤罪を晴らし、家の名誉を回復させ、崔徳贄を流罪にした。

ある者が、華州の張元<sup>か</sup>が西方の趙元昊<sup>ちようげん</sup>に仕えようと逃亡したと訴え出た。張元一族百余人が捕えられ、房州で取り調べることになった。百余人は嚴重に監視されて房州に連れて行かれた。飢えと寒さのために途中の道でいまにも死にそうになった。公は「張元が趙元昊のもとに走ったどうかさえまだわかっていない。もしそれが本当だとしたら、張元は家を棄てて行ったわけだから、親類一族に罪はない」と考え、お上の意向を秘かに聞いた上で、これらの人々を釈放した。皆は泣いて感謝し、公の画を描いて祠におさめた。いまに至っても公を祀るのを絶やさずにいる。

公を中央で用いようとする声が上がった。しかし、「地方での実践こそが私の願うところですよ」と言って、公は宿州<sup>しゆく</sup>の知事になった。宿州には汴河<sup>べんが</sup>が流れ、そこに架かる橋が舟運の邪魔になるというので、水に生きる者と陸に生きる者との間で論争が絶えなかった。そこで公は初めて飛橋<sup>ひきょう</sup>というものを造った。飛橋は高く大きな弧を描いて川をまたぎ、橋を支える柱を河中に立てることもないので、船の航行を妨げることはなくなった。それ以来、汴河にかかる橋はみな飛橋になった。……  
(中略)……

公は鳳翔府の知事となった。そのとき鳳翔府には十二年ものの穀物が貯えられ

ていた。管理する者はそれが腐敗してしまうのを悩んでいた。公が着任した年に飢饉となり、貯蔵庫から十二万石の穀物を放出して民間に貸し出すこととした。役目の者はそれをどう処理したらよいのか頭を抱えてしまい、公が自身で取り行った。翌年は大いに稔り、貯蔵庫の穀物はすっかり入れ替えられ、官民ともによい処置だったと受け止めた。

西方の于闐<sup>うてん</sup>国からの使者が都に行くに際して、鳳翔府が管轄する地域を通過した。そのとき、接待役の者は定め通りに饗応したのだが、使者は甚だ驕慢で、一月以上も留まり、駅館の器材はおろか建物までも壊す狼藉を働き、さらには市場に行って飲食物を奪い取りもしたので、人々は恐れて昼間も戸を閉ざし、大騒ぎとなった。公はこのことを聞くと、このように言った。

「わしはかつて遼国<sup>りょう</sup>への使者として向こうに行き、その実情を見た。外国の人間とて初めから暴横なのではない。通訳の者がそのようにさせてしまうのだ。私は通訳の者に対して宋国の法をもって厳しく接したところ、通訳の者は恐れ畏まり、遼国の人間も特におかしなことはしかなかった。まして于闐国は遼国よりずっと小さな国ではないか」

公は気の利く役人を派遣し、通訳の者に向かってこのように言させた。

「我が国境の内側に入ったからには、もしもほんのわすかでも法を犯すようなことがあった場合は、わしはおまえを斬る。軍の定めに従ってそのようにし、于闐国の使者には還ってもらうことになる」

于闐国の使者はもとより公の威名を聞いていたので、庭に並んで公のいる鳳翔

府に向かってひれ伏した。公の命令で使者を馳走し、鳳翔府の管轄する境にまでついて行って送り出した。その間、誰一人として騒動を起こす者はいなかった。そのころ、州郡の知事は訪問客があると酒宴を開いて歓待し、私的な交際相手に対しても普通にそしていた。しかし、法としてはもとよりよろしくないことなので、きちんと取り締まるようになった。公は貧乏な旅人に酒食を与えていたから、「これは私的な行為であった」と費用を弁済した上で、法を犯したことを自分から朝廷に申し上げ、辞職を願い出た。そのことから官職を去り、その後間もなく六十四歳で亡くなった。

公は程<sup>てい</sup>氏を娶り、四人の男児がいた。陳<sup>しん</sup>忱、陳<sup>かく</sup>恪、陳<sup>じゅん</sup>恂はそれぞれ官職に就いたが、四男の陳<sup>せう</sup>慥だけは官に仕えなかった。

公の人となりは清廉かつ寡欲であった。並みの人より背が低く、顔は黒く、目は氷のように光り、普段から心の内を表情に出すことがなく、王公貴人も憚るほどの厳めしさであった。義を行おうと勇んだときには禍福を勘定することなく、必ずその志を果たすまでやめなかった。公が赴任したところでは悪い民や狡猾な役人は心を入れ替えて行為を改めた。それなかつた者は必ず厳罰に処した。それは真心からしたことであったので、厳しくとも残酷ではなかつた。学問を教えて士を育成することを熱心に進め、財産を軽んじて施すことを好み、恩義に厚かつた。

若い頃に蜀人の宋<sup>しよく</sup>輔<sup>そう</sup>と親しくして、宋<sup>しよく</sup>輔<sup>そう</sup>が都で死ぬと、老いた母と幼い息子が残されたので、公はその母の面倒をみることにし、自分の娘と宋<sup>しよく</sup>輔<sup>そう</sup>の息子の宋<sup>たん</sup>端<sup>べい</sup>平とを結婚させ、自分の子どもたちと一緒に勉強させた。宋<sup>たん</sup>端<sup>べい</sup>平は陳<sup>しん</sup>忱と一

緒に科挙に合格した。

公は高位に昇った特典で、子弟の幾人かを科挙によらずに官職に就けることのできる恩恵を皇帝より頂戴し、自分の子よりも親類の子の方を優先して官員とした。それで四男の陳慥にはその恩恵が及ばなかった。

公は私の父の蘇洵じゆんとは一家のような関係にあった。私は風翔で官職に就いたときに、二年にわたって公に仕えた。この時、私は若くて意気盛んで、愚かにも自分の行動を改めようとせず、しばしば公と衝突した。顔色を変えてひどい言葉を発したこともあった。後にそれを後悔した。

ひそかに思うに、公は古いにしえの真直ぐだった人たちの生き残りであったのだろう。国家においてもっと用いられて、もっと大きな仕事を成し遂げることができなかったのを残念に思う。公が没してすでに十四年、当時活躍していた士大夫でも公の事跡をきちんと知る者は少なく、ゆかりのある人も日に日に老いて少なくなっているの、いつか全てが埋もれてしまうのを恐れ、私はその事績を書き残したいと思っていた。しかし、詳しくは知らないので困っていたところ、范鎮はんちんが書いた墓誌を入手したので、それに自分が知っていることを補って、公の伝記を作ることができた。私は普段から伝記や墓碑の類は書かずに今日まできた。だから、書いたのはただこの文だけである。そうするのは、後の君子に見てもらいたいからだ。

(この後ろに「贊」という韻文が付くがそれは省略する。このころから、文章の得意な人に、墓誌や伝記の執筆を依頼することがさかんに行われるようになった。それは(とりわけ科挙に合格できなかった)文章家にはなかなか結構な収入源になった。蘇

軾はそういうことは好まず、自分が書きたい思うものしか書かなかった。この「陳公弼伝」は、執筆時には唯一の例外で、後に書かれたものを含めても最も長文の伝記である)

■七月二十四日以久不雨出禱磻溪是日宿虢県二十五日晚自虢県渡滑宿於僧舍會閣閣故曾氏所建也夜久不寐見壁有前県令趙薦留名有懷其人

この年も雨が不足し、7月24日鳳翔を発ち、太公望たいこうぼうがそこで釣りをしている周の文王ぶんおうに見出されたとの伝説のある磻溪はんけいで雨乞いをした。土地の人から、太公望に祈ると雨を降らせてくれると聞いたからだ。25日の夜中に目覚めて宿所の壁に記された詩を見ていると、雪見の宴に出られずに伏せていた蘇軾に詩を送ってくれた趙薦ちようせんの名があった。

夢に驚き、枕から頭を上げると、

いまはすでに真夜中であろうか、

人気のない寺に、ともしびが消えかかっている。

風の音が、深い谷間に、ざわざわとずっと響いている。

山の峰から月の光が射込んできて、

壁に記された詩がぼんやりと浮かび上がる。

かの人の消息を聞かないと想っていたまさにその人の姓名がある。

その詩を繰り返し吟唱する間に、

そろそろ太公望に祈りに行く刻限になったろうかと、  
北斗七星の傾き具合を人に尋ねる。

## ■二十六日五更起行至礪溪未明

翌朝、日の出前に宿所を出て、礪溪に行って雨乞いをした。

山を照らす松明たいまつに驚いたのか、  
猿がどざりと枝から落ちる。  
細い月がぼつんと浮かぶ下を、  
狭い谷へと入って行く。  
川底の岩を洗う川の波が、  
暁に向かって、冷たい音を一段と強める。  
太公望は遠い昔に白雲の彼方に飛び去り、  
神々しい跡だけがいまここに残っている。  
どうかして、太公望によって力を得て、  
雷神の後ろに従って馬を天へと走らせ、  
瓢ひさごを傾けて地上に大いに雨を降らせたいものだ。

(前の宋知事のもとでは、雨乞いをするとうすぐに雨が降ったのだが、今回はそうはならなかった)

■是日自磻溪將往陽平憩於麻田青峰寺之下院翠麓亭

雨乞いの後、別の仕事のために蘇軾は陽平ようへいという町に向かった。その間の詩。

青峰寺せいほうを目指すもまだまだ着くには至らない。

渭水いすいのほとりの村にまできて、

翠麓亭すいれきの名と小路のゆかしさにひかれる。

谷合いに朱の欄干がくっきりと映え、

まわりの山を超えて古い木が高くそびえる。

小路は岩の崖に突き当たり、

そこで林が切れ、下に河の流れを見る。

疲れた馬は青い草をほしがって鳴き、

翠麓亭を守る僧が「ここで休まれよ」と言ってくれる。

私がきたのは秋の昼さがり、

日照り続きであるから、石の台がことのほか熱くなっている。

どうかして、空を覆う傘のような雲を得て、

盆をひっくり返す雨を降らせることができないだろうか。

山のふもとに広がる田圃の稲が、

濡れた葉をいかりにも涼しげにひるがえす夕べの景色を、

ここで見たいものだ。

## ■妬佳月

陳知事との関係は悪化の一途をたどり、知事が主催する8月15日の中元節の行事に無断で欠席した罪で銅八斤を納めるべしとの罰を与えられた。蘇軾は秋の名月にちなんでこの詩を詠んだ。月を蘇軾に、雲を陳知事に、かなり露骨に譬えている。

雲は佳<sup>よ</sup>い月を妬んで猛り狂い、  
 飛んで飛んで千里の彼方まで空を真黒にしようとする。  
 佳い月は怒りしない。  
 月の白さそのものが汚されることは決してないからだ。  
 昔、李白が仙界から人間界に降<sup>り</sup>ろされたときに、  
 月と自分と我が影の三人が友だと言った。  
 今夜は黒い雲のせいで月が見えず、影もない。  
 その寂しさに、風の神がきてくれないか思う。  
 しかし、変わりやすい風の神などあてにしない方がよいだろう。  
 頬杖をついてしばらく待ってさえいれば、  
 空にはいずれ何もいなくなり、  
 黄金の丸い盤<sup>さんさん</sup>が燦々と輝き出し、  
 その光が青い天空の隅々までも満たすだろう。

星はそのために輝きを失い、  
夜露は洗いたての秋の色を宿すであろう。  
月がガラスの玉のような光のかけらをぼろりと落とせば、  
それは我が胸の内へと入ってくる。  
永遠にかけることなき光を得て、  
私は月の友となるのだ。

### ■和子由聞子瞻将如終南太平宮溪堂読書

陳知事と蘇軾の仲の悪さは都にも聞こえ、弟は兄の身を案じた。蘇軾は終南山にある道教の寺院、太平宮たいへいきゅうにしばらく籠って道教の経典を読むことにしたと弟への手紙に記した。弟はそれに対する詩を送ってきたので、その詩に和した。

外なる名に使われると、ただただ役目を勤めねばならず、  
内なる身に任せると、ただただ安楽やすを偷ぬすんでしまう。  
まことに愚かで拙い僕は、  
名と身の二つをともにうまくやりくりすることができない。  
いまさらのように僕は、官員としての口の利き方、  
公文書の書き方を学ばなければならなかった。  
ここにきてようやく罪人の訊問の仕方を会得したばかりだ。

官員というものは、

いま何をすべきか知ろうとしたら、

何はともあれ先例を調べなければならない。

官員というものは、

望む地位を得られずにいる間は、得られないことをひたすら憂い、

得られたら得られたで、それを失うことをひたすら憂う。

だからその心は決して落ち着くときがない。

疲れた旅人が道の途中で清らかな流れに出会い、

しばし休んで水を掬って飲んでも飽き足らず、

塵にまみれたまままた道を進まなければならないのと同じである。

僕は、春の鳥のさえずりを聞いたころに、

自然の内へと入ってみたいと思った。

あれこれ決めかねているうちにいまはもう秋の終わりだ。

御陵造営の期限が迫りきて、府県の役人は仕事の手配に忙しい。

国家の事業であるから不平を言うべきではないけれど、

民衆を煩わせることに恥じらいを覚えないわけにはいかない。

しかも、いまは日照りの嘆きがある。

僕は何よりも雨を呼ぶ術を学ばないといけない。

川の水は涸れ果て、川底の泥まで乾いてしまった。

一本の木を千人がかりで曳かなければならない。

人々は十歩進むために八回も九回も息継ぎをする。  
こうしたことを見ていると、食事さえ欲しくなくなる。  
何かをする気力の一切が失せてしまう。  
もしも秋の雨が十分に降ってくれたならば、  
公務の合間に新酒を味わうこともできようかと想像はするのだが、  
いまの骨折りが幸いにも終わったとしても、  
朽ちた自分にはもはや任務に耐えられなくなってしまっていることだろう。  
だから、秋の風が僕を丘へと誘い出し、  
せめて一日の楽しみだけでも得て、  
百日の愁いを慰めようと思うのである。

(御陵造営とは、この年の3月に皇帝(仁宗<sup>じんそう</sup>)が亡くなり、その陵墓を国の事業として造ったことをいう。鳳翔府には大量の木材を期日までに山から搬出せよとの朝廷から指令があり、蘇軾は現場監督として山に派遣された。日照りの害は木材の運搬を困難にし、蘇軾は疲れ切って太平宮でのしばしの休養を求めたのである)

## ■将往終南和子由見寄

太平宮に向う前の夜にも詩を作って弟に送った。

人生はたかたか百年、  
髭や髪が白くなるだけの時間しかない。

富貴なんぞは葦の若い茎の中の薄皮ほどのものでしかない。

墨をしたたらせて詩文を書くなどという行為は、

酔いつぶれてきれいなお姐さんに介抱されるよりは、

いくら体裁がよいだけのことだ。

このところ僕は学問をやめてしまったので、

しばらく吹かずにいた笛が詰まって音が出ないようなありさまだ。

今年も残すところ少なくなり、

秋の風がもたらす水のような涼気が身に沁み入る。

明日は南の川に行って鳥や獣を友としようと思っている。

寢床で落ち着かぬまま夜明けを待っている。

昔むかし、一生涯ただ筆だけを弄んで、

鳥のように全身真黒になりたいと願った人がいた。

僕もまったく同じことをいま思っている。

門を閉ざして一日中僧侶のように座り続け、

官爵などは泥のように見下すのだ。

僕はどうしてこうもぐずぐずしているのだろう。

歳月は自分と一緒にぐずぐず留まっていはいくれない。

もう夜が明けるのか。

僕の馬に<sup>まじき</sup>秣が与えられようとしている。

## ■ 読道蔵

太平宮は宋の2代皇帝(太宗)によって建てられ、道教の經典である道蔵の一式が納められた。蘇軾は道蔵を見ることを一つの目的として太平宮を訪れた。

どのような幸いに恵まれたのか、  
この道教の寺にたまたまくることになった。  
何がここにあるかという、  
千の箱にぎっしりと書物が詰められている。  
赤い錦の囊ふくろに納められ、  
青い霞の裾のような紙でぐるまれ、  
仙人が箱に鍵を掛け、  
神がその部屋を守っている。  
神の隙を窺って書物を覗こうというのだから、  
ゆっくり眺める時間はない。  
それでも、真理を知る人は一言で悟れるというし、  
道は静かな心に集まるともいうから、  
心を長閑にして蓮のつぼみを想い見るならば、  
おのずと純白の大輪を咲かすこともあるだろう。  
かくて俗世を離れて千年の彼方に去れたならば、

その後<sup>しかばね</sup>に遺した我が屍<sup>むしろ</sup>を包む蓆に、

我がこの詩がなるであろう。

人はかりそめの身をいい加減に扱って、

土くれ、草きれで養おうとしている。

私は道教の真理を得て我が憂いを除きたいと思っている。

それさえできなくて、

天下を治めることにどうして関わろうなどとしているのだろうか。

## ■扶風天和寺

木材を運び出す仕事はどうか終わらせることができ、蘇軾は9月半ばに数日の休暇を得て家族を連れて鳳翔府から離れ、扶風<sup>ふふう</sup>にある天和<sup>てんわ</sup>寺を訪ねた。

遠くから見るとき、

朱色の欄干や青い瓦が山に映え、

なかなか愛すべき景色であると感じた。

近づこうとすると、

一步登るごとに足を止めて息を継がねばならず、

百回以上も寺を見上げることになった。

川の底には水がなくて石が現れ、

野の上には塵が上がって遠くの町の楼閣は見えない。

風に臨んで声を出すのはよそう。

我が思いのほどを抑えられなくなってしまうだろうから。

## ■稜説送張琥

鳳翔府には張琥ちやうこという「同年」の同僚がいた。「同年」とは同じ年の科挙でともに合格した者である。その張琥が鳳翔での任が満ちて都に帰ることになり、この文を贈った。

富む人の田で穀物がどのように稔っているのか、君は見たことがあるだろうか。富む人の田は良質でしかも広いから、食べるに十分な収穫が得られて余裕がある。広いから交替で休ませることができ、地力は完全なままに保たれる。余裕があるから、種を植えるのに時期遅れになることはないし、すっかり熟してから収穫することにもなる。だから、富む人の田では穀物の稔りはいつも上質で、中身がすかさずかの粉は少なく、実が充実していて長く保存しても腐ったりしない。

もし私が十人家族で、百畝ひゃくの田しかなかったとしよう。一寸の幅の田からも逃さず収穫を得ようと、日夜それを望んで耕したり均なしたりする。いつも魚の鱗のように人がびっしり張り付いて仕事をするから、地力は竭つき果ててしまう。収穫は家族が食べるのに足りないから、種を植えるのはどうしても時期に間に合わないし、刈り取るのは熟すのを待ってなどいられない。これでどうして上質の穀物が稔ったりするだ

ろう。

いひえ

古の人は、その才能が今の人よりもずっと優れていたということはないであろう。古の人は普通の暮らしでも、自分の持っているものを自分でよく養い、軽々しく用いるようなことはせずに、十分に熟成するのを待った。それは赤ん坊がゆっくりと成長するのを待つと同じようであった。弱いところがあれば養って剛つよくなるのを待ち、うつろなところがあれば養って充ちるのを待った。

こうして古の人は三十歳になってようやく出仕し、五十歳になって高い地位に就いた。長らく身の内に貯め込んでおいた末に、十分に充実させ、大きく伸ばしてから世の中で用いられたのだ。あるいは、身の内から溢れ出て余りあるまでになってから外に流し出し、あるいは、十分に弓を引いてから放ったのである。これが、古の人々がいまの人々よりもずっと優れていた理由である。

私は子供のころに学問を志し、不幸にして早くから成果を得て、君と同じ年に科挙に合格した。君もまた早くなかったわけではない。私は自分の学問はまだまだ不足していると考えていたかったのだが、まわりの人がむやみと推薦して下さり、今のようなことになった。

君はここを去って後に、どうか学ぶに努めてほしい。広くいろいろなものを学び、肝心なところを掘み取り、厚く積み上げて外に出すのは少しだけにする——私が君に告げるのはこれに止まる。

君は都に帰ったら、是非訪ねてほしい人がいる。それは蘇轍、私の弟だ。同じことを弟に君から語ってほしいのだ。

(張琥が十数年後に蘇軾に対してひどい敵対行為をしたことを思い合せると、どのような背景のもとでこの文章が書かれたのか、いろいろと想像させられるものがある。張琥と蘇軾は同時に科挙に合格して鳳翔府で同僚となった。蘇軾は母の喪に服していたから、官員としてのキャリアはその分だけ張琥の方が長かった。ところが、蘇軾は制科に合格して天下にその名を轟かせ、いきなり張琥よりも重い役を授かって鳳翔にやってきただけでなく、「鳳翔八觀」などの詩で圧倒的な才能を見せつけ、さらには宋知事に大いに可愛がられた。張琥が面白からぬ思いを抱いたと想像してもたぶん間違いないだろう。蘇軾が同僚から無視されたり、陳知事との関係が悪かったりした背後には張琥がいたと想像するのは行き過ぎかもしれないが、そのようなことに対して蘇軾は大人の対応をし、別れ際に、焦らず己を成長させることに努めてほしいと、巧みな比喻を用いた助言をし、なおかつ角が立たないよう弟への伝言も依頼した。張琥が素直に受け止めるような人ならよかったのだろうが、残念ながら張琥はさらに気持ち屈折させ、十数年後に鬱積したものを晴らそうとした——張琥にとって不名誉な想像であるが、それはかなりありうるだろう)

## ■十二月十四日夜微雪明日早往南溪小酌至晚

鳳翔府の郊外に南溪なんけいという小河川があり、蘇軾は雪の朝にそこに行って大いに気に入った。後に小さな庵をその近くに建てることになる。

兩岸に雪が積もった南溪の景色は、

とてもではないが値がつけられない。

雪の消えないうちにと馬を走らせてきて、

木々の間から抜け出て、

雪の中に道を探して、

まだ足痕のない朱塗りの橋を一番に渡った。

興に乗じてなおも行くと、崩れた家があった。

この家の人は雪に埋もれたままでどうやって眠ったのだろうか。

さらに小さな村に行き着くと、

ひっそりとして人の声が全く聞こえない。

人々はすでに飢餓に迫られているのか。

年の暮れの鳥の鳴き声だけがあたりをこだまする。

我が馬の足音に、鳥が驚いて飛び立ち、

枯れた枝からぱらぱらと雪のかけらが落ちてきた。

(雨が少ないために飢饉の危機が迫りつつあった。雪は豊作の予兆とされ、この詩には希望がこめられているとともに、鳥にからかわれるような無力な自分を嘆いてもいる)

ちんぞう あざな きりょう  
 (このころに蘇禿<sup>ちんぞう</sup>と陳慥<sup>あざな</sup>(字は希亮<sup>きりょう</sup>)に出会った。「陳公弼伝」にあった陳知事の四男である。陳慥は仕官せず、土地の豪傑と交わり、無頼な日々を送っていた。蘇禿は、それが何者であるか知らないままに、野で鳥獣を狩っていた陳慥に偶然出会い、たちまち意気投合した)

■次韻子由種菜久旱不生

治平元（1064）年、蘇軾<sup>じへい</sup>29歳。

天候不順が続き、都のあたりでも雨が少なく、弟から、家庭菜園に菜を植えても芽が出てこなくて困っているという詩が届いた。その詩に次韻した。

新たな春がきたころには、

塩漬けの菜の蓄えは、甕<sup>かめ</sup>がひっくり返しとなって、

すっかり尽きてしまった。

それでも、そのうち階<sup>きざし</sup>の下<sup>たげのこ</sup>にても、筍の芽が出てくることだろう。

麦畑のあたりを巡れば、野の草も芽を出しているだろうから、

それらをちよいと摘んで、

どこか僧坊などを訪れて、軽く茹でてもらって食べてもよいだろう。

食べられるものはどうせそこらにあるのだから、

菜園に雨の恵みがないと心配しなくたってよいのではないかな。

問題は天候ではなく、

世の中と自分が合わないことだというのなら、

田舎に引っ込んで田畑を耕せばよい。

それこそ食べるに困りはしないだろう。

ともあれ、新たな春の恵みを、  
 菜園おいくに生来る菜の芽に見たいと言うことなら、  
 また一つ年を取って、頭に自ずと白いものが芽生えるのを見れば、  
 それでよいのではないのかい。

(ここで楽観的な考えを表明しているのには、次に記すように陳知事との関係が改善され始めたことが反映しているのかもしれない)

## ■凌虚台記

陳知事は鳳翔の官舎の近くに凌虚台りょうきょだいという見晴らし台を造り、その完成を記念する文章を書くよう蘇軾に依頼(指示)した。このような場合は、先に「鳳鳴駅記」(本章 51 ページ)で見たように、知事の徳を称えて祝意に満ちた文章を書くのが普通である(権威に媚びる意図があってもなくとも、執筆を引き受けたからには礼儀としてそうすべである)。蘇軾ははなはだ無作法な文章を記した。

ここ鳳翔しょうなんざんは終南山の麓に位置し、起居、飲食、常に山と接している。

鳳翔の四方に終南山より高い山はなく、終南山の近くに鳳翔よりも立派な都市はない。互いに近くあって、互いに最高であることを求めるならば、必ず終南山と鳳翔ということになる。

知事陳公は鳳翔に住まうようになってから、終南山がすぐそこにあるのを知らずに

いた。山があるのを知らなくても政務にさしさわりのあるわけではない。とはいえ、ものの道理として終南山を知らないというのはいない。そもそもが理に反していることから始まってここに高台が築かれることになった。

あるとき陳公はたまたまこのあたりを歩いていて、林の木々の上に山があるのに気付いた。自分が歩くとともに山が林の上を移ろうのを見て、塀の向こうを道行く人の頭が移ろうのと似ていると感じた。

「特に優れた眺望がここに得られそうだ」

陳公はそう思うと、この前面を掘って四角い池とし、その土を盛って家屋の軒より上に出る高さにせよと人々に指示した。こうして高台を作れば、そこを登る者は、自分が高みへと上がって行くとはあまり意識しないで、終南山が自ら高々と飛び出して来ることに驚くであろうと、陳公は考えた。

「山が中空に突き出る、つまり虚空しのを凌りょうきょぐ、凌虚という名がよろしかろう」

陳公はそのように高台の名を定め、完成した暁には記念となる文章を書くよう私蘇軾に求めた。

そこで私は次のように申し上げた。

「物があるいはすた廃れ、あるいは興り、あるいは成り、あるいはこぼ毀たれるのは必ずしも人の意のままにはなりません。それでも、とどのつまりだけは知ることができます。昔ここが荒れた野であり、わびしい田であり、露や霜に繰り返し覆われ、狐や狸がすみかとしていたときに、いずれ凌虚台が築かれると誰が予想できたでしょうか。あるいは廃れ、あるいは興り、あるいは成り、あるいは毀たれるという連鎖は無窮

に続き、凌虚台が後にまた荒れた野ないしはわびしい田になるということは知らずにいようとしてもできるものではありません。

凌虚台が完成しましたら、試しに一緒に高台に登ってみようではありませんか。望み見るのは、東に秦の穆王の祈年宮しん ぼくおう きねんきゅう たいせんきゅうや橐泉宮たうせんきゅうのあったところ、南に漢の武帝ふていの長楊宮ちやうようきゅうや五柞宮ごさきゅうのあったところ、北に隋の仁寿宮ずい じんじゆきゅう、唐の九成宮とう きやうせいきゅうのあったところ、です。それらが最も盛んであったころには、その規模は宏大、外観は美麗、堅固で動かぬありさまは凌虚台の百倍どころではなかったであります。しかし、王朝の繰り返しを経たいま、せめてそのよすがを彷彿とさせるものを求めようとしても、割れた瓦、崩れた塼さえ存在していません。麦畑いばらや茨の荒野を載せる丘だけが、あります。この高台がこれから先にどのようなことになるのか、言うまでもありません。

この高台に託して、虚を凌いで長く久しくあろうとしてもできるものではありません。まさしく理に反しているからです。人間世界において得たり失ったりするものは、たちまち来てはたちまち往くだけのものなのではないのでしょうか。

世に誇るべきものを作って自己満足を得ようとするのは大きな過ちです。長く久しくあるとたのむに足るものがもともとあるとしたら、この高台の存亡などとは関わりがなかに違いありません」

私は陳公の前から退くと、そのままを文章に記した。

（凌虚台を築く意図そのものが愚かしいと、「それを言っちゃあおしまいよ」みたいなことを書いたのだが、驚くことに、陳知事は蘇軾のこの文章をそのまま碑に刻んで凌

虚台の下に置いた。さらに驚くことに、これを境に陳知事と蘇軾の関係は急速に改善されたようである。「陳公弼伝」(本章 71 ページ)にあった飢餓対策や于闐<sup>うてん</sup>国の使者への対応などに、たぶん蘇軾は関与したのだろう(だからこそ特筆した)。正しいと信じることを常に堂々と述べる蘇軾の姿勢を、陳知事は正当に評価したのだろう。

## ■自清平鎮遊楼觀五郡大秦延生仙遊往返四日得十一詩寄舍弟子由同作

1月に章惇<sup>しょうてん</sup>と数日間を過ごす機会を得て、短い旅の間に見聞きしたことを11篇の詩にまとめて弟に送った。その中から2篇を訳す。

### 大秦寺<sup>たいしん</sup>

平原を流れる川筋をさかのぼり、  
それが幻のように消える先に、  
斜めに横たわる緑の山裾があった。  
行き行けば、山また山となり、  
そのまた遥かな奥に、  
くっきりと一つの塔がそびえていた。  
足に任せて尋ね入り、  
塔の上に立って、風に臨んだ。  
顧みると、海のように原や田がどこまでも広がり、  
驚くことに、その全てが東に向かって傾いているのだった。

(大秦寺は景教、すなわちネストリウス派のキリスト教の寺院。大秦とは東ローマ帝国のこと。景教は唐の時代にかなり流行し、各地に多数の大秦寺が建てられた。宋のころにはすでに勢いを失い、蘇軾がここで見た<sup>ちゅうしつ</sup>盤屋の大秦寺など残るのはわずかかとなっていた)

ほくじ  
北寺

唐の初めからこの北寺はあったと聞く。  
唐の終わりの世の乱れを経て、  
寺はさびれ、当時の石碑すら残っていない。  
どこも虎を恐れて早々と門を閉ざし、  
近くに村はなく、米を得ることもできない。  
山の泉で甕を満たすことならできても、  
野の草で腹を満たすことはできない。  
ここはまことに美しいところだが、  
長くここにいるためには、  
飢えを忍ぶことを学ばなければならない。

■和子由記園中草木十一首

弟は都の家の庭を「南園」と呼んでいろいろな木や草を植え、その一つ一つを主題にした11篇の詩を作った。その全てに和して返した中から4

首を訳す。

其の一

光り輝く帝王の都の大路を、  
目にもまぶしい人々が行き来している。  
そこで君は何をしているのかと問えば、  
「門を閉ざして草や木を観ているのです」と答える。  
微々たる草や木など観て何になるのか。  
「物の変化を飽きることなく観ているのです」。  
藤の品種けんぎゅうの牽牛、蓼の品種きりゅうの葵蓼を育て、  
君はそれを言葉に変換して摘み採り、  
詩巻の中に納めた。  
昔、謝安しゃあんは引退後に自然の内に遊ぶのを好んだけれど、  
いつも妓女を連れ、酒を置いた。  
そうしたものの力を借りなければ、  
富貴を忘れ、心を慰めることができなかったのだろう。  
いまの君はそのようなことはなく、  
富貴などは蔓がまどわりつくくらいにしか見ていない。  
自分の内側に抱いている宝に満足しているから、  
あえて高潔さを示すような植物を植えることもない。

僕は早く君のもとに帰りたいと思っている。

年末まで待てないどうか嘆かないでほしい。

僕の方こそ早くと願っているのだから。

（「年末」といっているのは、この年の12月で鳳翔での3年間の任期が満ちるからである）

## 其の二

僕の官舎の庭は狭いものだが、

ろくに手入れをしないので、

草や木がいつの間にやら林のようになってしまう。

春の雨がひとたびあまねく降り注ぐと、

美しいのも醜いのも我がもの顔に伸び上がる。

ぶどう  
葡萄は自立できないから棚にしがみつこうとし、

ざくろ  
柘榴は破れた赤い布のような花を咲かせ、

あかい  
葵は美しい花をつけるが髪にさすには茎が短すぎ、

たで  
蓼の赤は秋の終わりまで待たなければならない。

物はそれぞれ時節に感応して生きているのであって、

君はこのようなことから物の変化の本質を観て、

人間界の興廃も同じあると見ているのだろう。

草や木が勢いを得て盛んになるのは、

草や木の持つ能力によるのではなく、  
草や木が枯れて散るのも、  
やはり自分で自由にできることではないのであろう。

其の十

秋の谷川に野菊が開いた。  
菊の花の心を知るのは菊の花自身だけで、  
ここには、  
菊の花を見て、早くも一年が過ぎ行くと驚くような人間はいない。  
かたわらに秘かに悲しむ蟋蟀こおろぎがいる。  
谷川のほとりで開いた菊の花は、  
谷川の汀に誰にも知られずに落ちる。  
菊が枯れると蟋蟀は土に帰り、  
また来年に会おうと約束する。  
昔むかしのある多感な人は、  
秋の風に心を痛ませ、  
夕べには悲しみのあまり落ちた菊の花を食べたと、  
詩に詠んだけれど、  
僕が思うに、  
菊の花を拾い集めたところで、

朝飯前の腹の足しにもならないだろう。

### 其の十一

八月十一日の夜、

府学ふがくに泊り込んで君の詩に和しているうちに、

いつしか眠りに入ってしまった。

夢から覚めると、

目にはまだ山の緑がありありと残っていた。

心は白雲とともに飛び去り、

故郷の山の麓のあたりを巡り歩いていたのだ。

君もまたどこかからかやってきて、

白い歯を輝かせてにっこりと笑い、

懐から新しい詩を取り出した。

その詩句は山の景観をしのぐすばらしさだった。

いま君の詩を思い出そうとして、

秋の菊を詠んだということ以外ぼんやりしてしまった。

昔、薪を採りに山に入った人が、

仙人が洞穴の中で奏でる琴の音を耳にし、

里に帰ってから、わずかに記憶に残るところを人に聞かせると、

人間界のあらゆる曲より優れていた。

君の詩もきっとそのようなものであろうから、  
断片だけでもいいからどうか教えてほしい。

(鳳翔には府が運営する学校、府学があり、蘇軾はそこで時々学生を教えた)

## ■次韻和子由聞予善射

「教戦守策」(本章 11 ページ) で見たように宋の西方には夏<sup>か</sup>国があり、たびたび宋との間に武力衝突を起こしていた。鳳翔は夏国との国境に近く、それへの備えが必要であることを改めて実感した蘇軾は自ら武芸の鍛錬に励んだ。そのことを弟が詠んだ詩に和したもの。

都のお偉いさんは、  
繁華の地で羽振りよく振る舞うのに熱心で、  
遠い国境で戦の太鼓が鳴ったりすることなど思ってもみない。  
鄙びた武将が文学を論じるのが得意でないように、  
雅な文人は弓を射るのは得意でない。  
だけど僕は、  
やなぎ  
楊の細い枝先に百発百中で射当てても、  
「いやいや、なんのこれしき、特段の腕前ではありません」  
と笑ってみせたり、  
高い城壁に立って隼を射落としてから、

すぐさまひらりと馬にまたがり、  
 敵の馬群を蹴散らしてみせたりしてやろうと、  
 心の内でずっと考えているのだ。  
 しかし、君こそは長身であるのだから、  
 弓を学ぶのにもっともとうってつけて、  
 かの関羽かんうだってきつと追い抜くことになるだろう。

（関羽はいうまでもなく三国志の有名な武将。蘇軾の腕前が関羽に迫り得たとは考えにくい、少年の頃は非常に敏捷であったと回想する詩があり、第1章28ページの詩からも運動能力はそれなりに高かったものと推測される）

## ■次韻子由論書

前の詩とは一転してこれは書しよが主題の詩で、弟が書について論じた詩に和した。蘇軾は後に宋代の第一級の書家と目されるようになり、書に関しておびただしい数の詩文を作り、書論を縦横に展開する。

僕しよは書がうまいわけではない。  
 だけど、僕以上に書がわかっている者はいないのではないかと思ったりもする。  
 書が何たるかがわかっているならば、もう学ばなくてもよい。  
 美しい人は顔をしかめても美しい、  
 美しい玉は歪んでいても美しい。

書もそうで、

端正な中に崩れたところがあってもよいし、

剛健な中にあだっぼいところがあってもよい。

字の態勢は大らかであるのがよく、

筆の収まる場所は細心であるべきだ。

そうはいってもその通りにできるものではないから、

字を書いても、端から捨てることになる。

ところが、僕の書がよいなどと、

手に入れようとしてくれる人がいたりするのは、

一体どういう勘違いなのだろうか。

君がくれた詩では僕の書をほめてくれているけれど、

贅辞が過ぎて、僕の実力はそれに耐えるものではない。

このごろ僕は弓を学んでいて、

やはり力不足で、弓の強さに僕の腕は耐えられずにいる。

あれこれ好むものがたくさんあっても、

何も成就しなければ意味がない。

いっそ全てを捨て去って、

怠け放題にした方がよいのかもしれない。

昔の書法では、

早馬はのろ馬に及ばないと言ったものだ。

今の世俗の筆は気持ちが悪く外に出過ぎて、  
 多くは無理があって安らかでない。  
 昔の書家は遠くに行って、  
 僕の考えはいまの時流には合わないのだろう。

### ■記所見開元寺吳道子画仏滅度以答子由

鳳翔かいげんの開元寺には、釈迦の誕生から亡くなった後までを描いた大きな壁画があった。それについて詠んだ弟の詩に和した。一部分だけ訳す。

釈迦が仏道を修めて後に入滅すると、  
 あらゆる世界から皆が集まりきて、  
 天も人も悲しんだ。  
 鳥の哀れな鳴き声に、林も泣いてもたえ、  
 獣の哀れな足摺りに、泉も熱い涙をほとばしらせた。  
 このとき、釈迦が亡くなったしどね褥じゆのまわりを、  
 穏やかな心で巡り歩いたのは誰であったろうか。  
 太い眉、奥深い目の羅漢らかんであった。  
 僕は開元寺を訪れ、  
 香の煙に向こうに、  
 この場面を描いた古い画を見た。

釈迦が亡くなって、月は輝きを失った。

しかし、この画にはなお光が残った。

画師の姓名は書かれていない。

縦横な筆使いは名のある画師を軽化のぎ、

巨大な鰐が小魚どもを呑む勢いがある、

人々は呉道玄の作であると言っている。

## ■九月中曾題二小詩於南溪竹上既而忘之昨日再遊見而錄之

南溪（本章 91 ページ）に草堂を建てたのは夏のこと。9月にそこで詠んだ詩から 1 首を訳す。「へきせいどう避世堂」と名付けたその草堂は人里から離れたところにあり、時には虎が姿を見せるので夜は外に出ないようにと、村人から嚴重に注意された。

もくもくと山の頭に雲が湧き立つと、

ぱらぱらと水辺に雨が注ぎ始めた。

溜池の水が減って、蓮は枯れようかというこの時節、

町の人が帰って、虎が出てこようかというこの時分。

人間の住むべきところが、

虎の住いになってしまっているのは困りものだが、

山を焼けば虎を追い出すことができると言われても、

この千本の竹の緑を愛するのでそういうこともできない。

■南溪之南竹林中新構一茅堂予以其所處最為深邃故名之曰避世堂  
鳳翔での任期が満ちるころに南溪の避世堂で詠んだ詩。精神の安定を得るにはこのような場所が必要であったのだろう。

避世堂の名の割には、  
世間を離れることのお浅いのを残念に思い、  
竹林のさらに奥へと分け入ってみた。  
自然を愛する者に虎を恐れる心はない。  
世を避けようというのだからそもそも俗な心もない。  
枯れたありさまは生気を失ったかのようで、  
無言のありさまは言語を失ったかのようだ。  
官服を脱ぎ、冠をはずし、帯をゆるめて安らえば、  
鳥がともに思いを歌おうと誘いにきてくれて、  
猿が夢から覚めよと起しにきてくれる。  
避世堂に帰った夜に、  
階のあたりに雪が積もり出した。  
昔むかし、ある禅僧のところに、  
緑色の毛を長く伸ばした仙人が訪ねてきたというけれど、

それはまさにこのようなときであつたらうかと、  
じっと耳を澄ませて戸を叩く音を待った。

### ■和子由苦寒見寄

鳳翔での3年の任期がいよいよ終わる冬になってからの詩。これも弟の詩に和したもの。

人生というものは百年に満たない。

君と別れてからそのうちの三年を費やしてしまった。

その三年は僕等にとってどれほどのものだったのだろうか。

捨て去ったものは、もう帰ってくる道理がない。

僕がいつも恐れているのは、

別離の間にただ髪がますます白く、顔がますます衰えてしまうことだ。

かつて僕は喜んでものを書いたのだが、

君と別れてからはろくなものが書けない。

書こうとしてものを考えると、

君との楽しさが思い出されて、

結局は憂いが湧き上がってきてしまうのだ。

たとえ天下の士人を自分に従えるようになったところで、

君と歓びを一つにした方がずっとよい。

うらやましいのは、君が外には出ないで、  
 座り続ける敷物に風が湧いても気付かないほどに、  
 書物に没頭していることだ。

男子たるもの出处進退はまことに重い。

三年の期が満ちる僕は、退かずに進むべきだと思っている。

折しも西方の国々は互いの恨みを解消して一つになろうとしている。

それは我が方に侵入してくるためではなからうかと、

勇猛果敢な士人は恐れている。

朝廷は戦を望んでいない。

しかし、敵はいつだって天を欺いて攻め込んでくるのだ。

この土地の人々は、

衣服を買うよりも戦いに使える馬を買い、

身を飾るよりも刀を飾ることを好む。

いつかこの人々を率いて、

敵との駆け引きをしたいものだと思っている。

(蘇軾がこの詩のように勇ましいことを言うのは実は珍しく、後の詩にはほとんど見られない。若さのせいなのか、鳳翔という土地柄が反映しているのか……)

## ■凌虚台

蘇軾が任期を終えて鳳翔を発つに当たって、陳知事は凌虚台で送別の宴

を開いた。

陳知事は氣位高く、激し<sup>げき</sup>やく、  
何事も真直ぐでなければ気がすまないので、  
交際を求めて近づく者はまずいない。  
知事も人と付き合うよりは、  
この凌虚台に登り、  
客人として山々を迎え入れ、  
杯を挙げる方がよいと考えている。  
青い山々は遠くにあっても、  
知事が凌虚台からその顔をのぞかせると、  
たちまちどたばたと駆けてきて、  
他の誰にも見せないいい姿を惜しむことなく披露する。  
今日は、ここに人々が集い、  
礼儀作法などは忘れ、自由に振る舞ってよいとの、  
知事の思し召しであるから、  
大いに気分をよくして、高らかに歌声を上げた。  
そうこうするうちに、夕日ができるすると落ちて、流れる雲にさしかかり、  
淡い光を緑の壁に投げかけるようになった。  
今年もここに暮れようとし、

綿入れの衣にも雪が降りかかるような寒さを覚えるまでになった。

知事は、ではこれまでと、人々とともに凌虚台を下った。

私は山とともにしばし残っていると、

一人の客人が勇まじげに登ってきた。

このとき、雁の群れが台の上のはるか高くにさしかかった。

客人はきらびやかな飾りの付いた弓を手にし、

ひょと、天空に向かって矢を放った。

矢は雁とともに遠く天上の涯に落ちて行った。

客人はからからと笑い、

青い山々はその声に驚いて凌虚台から立ち去った。

(陳知事はこの翌年の4月に亡くなっている。最晩年に蘇軾を鍛えたのは陳知事の立派な業績と見てもよいのかもしれない)

(この詩の終わりに登場する矢を放った客人は、陳知事の四男の陳慥ちんせうのイメージであろうか。これから十数年後に、蘇軾は思わぬところで陳慥に救われることになる)

## ■ 亡伯提刑郎中挽詩

前の年の8月に伯父の蘇渙そかんが亡くなった。伯父は蘇の一族で初めて科挙に合格した人で、蘇軾が制科の受験準備をしていたころ、伯父も都に滞在していて、官僚としての心構えを教わったりした。そして試験の直前に、伯父が新しい任地に向かうのを都の門の外で見送り、それが伯父の

姿を見た最後となった。そのとき伯父は 60 歳で、すこぶる壮健であったから、それからわずか 1 年での訃報は突然過ぎて、蘇軾が昨年の秋以降不調に陥った一因となったと理解することもできるかもしれない。その伯父を悼む詩を作ったのは 1 年以上経ってからだった。2 首のうちの 2 首目を訳す。

## 其の二

手を振って都の東の門で別れたとき、  
伯父の顔はつやつやし、髪に白いものはなかった。  
そのときのありさまが夢のように思われ、  
いまだに亡くなったのが信じられずにいる。  
後に遺されたのは千余篇の詩と文。  
新たに作られたのは天の彼方の墓。  
昔むかし恩人の息子が困窮しないですむよう、  
皇帝の前で物まね芸を披露した人がいたが、  
いまそれをするのはいったい誰なのだろうか。

(一族は助け合うという意識が昔の中国の人には極めて強くあった。伯父の息子たちは科挙に合格しなかったので職に就くことができずにいた。大黒柱を失った伯父の一家を援助するためなら何でもしようというのが末の句の意味である)

(遙か後の元祐3 (1088) 年に弟の蘇轍が伯父の墓表を書いている。兄弟にとって伯

父は極めて大きな存在であったから、墓表の概略をここで見ておきたい。

蘇氏は唐の世に初めて眉州に住み、唐の後の五代十国時代には官に仕えることはなかった。蘇氏に限らず、眉州の士大夫は家において身を修め、郷里を治めることに関わり、出仕しようとする者はいなかった。宋の真宗のときに眉州から初めて孫堪が科挙に合格した。孫堪は世に目立った働きをする前に亡くなった。眉州の士大夫はやはりもとのままで安んじ、進取の気にはやる者はいなかった。このとき公(伯父)は独り発奮して学問に励み、科挙に合格した。公は官僚となり、法に基づいて民衆を指導し、行く先々で循良であるとの評判を得た。

公の諱は渙、字は始めは公群であったが、晩年に文父と改めた。公は少年のころから賢く、父(蘇序)は家のことは自分が全て行い、公には学問に専念させ、司馬遷の『史記』や班固の『漢書』を筆写させた。公はまだ少年であったけれど、交際するのは年長の有徳者ばかりで、文や詩はそれらの人々と優劣がなかった。天聖元(10237)年に科挙の一次試験(郷試)を受験した。眉州の知事の蔣堂は公の文章を見て、その巧みであることに感心し、「君は眉州で第一番だ」と言った。すると公は「眉州にはたくさん年長者がおります。とくに楊異、宋輔とは学び合う仲間で、二人に先んじるのは私の願うところではありません」と答えた。蔣堂はますます公は賢い考え、「それなら君は第三番としよう。それで君の名を輝かせよう」と言った。翌年、公は科挙の最終試験にも合格し、郷里の人々は皆喜び、公が帰郷したときには出迎えの者が百里にわたって並ぶほどであった。

公は鳳翔府宝鶏県の主簿となり……(中略)……

閬州の通判になったが、当時閬州では、官が必要とする物資を集めて運搬する労役を民

衆に課す定めがきちんと運用されておらず、争い事が絶えなかった。公は閬州に来ると、規約を定め、争いは止んだ。公の政治は極めて寛大であり、しかし法で決めたことは必ず守らせた。そのため官吏は畏れ、民は安心できた。閬州せん とうしんの人の鮮于侁は若くて篤学であったので、公は厚遇し、科挙を受けられるよう支援し、それによって合格した。鮮于侁が初めて官僚になったとき、公は法を守ることを教えた。後に鮮于侁は朝廷の大官となり、名臣と讃えられるまでになった。公の父(蘇序)は、公がどのような政治をしているのか、眉州から閬州にまで見に行った。よくやっているのを見て喜び、数ヶ月滞在して帰った。たまたま近隣の州で兵乱があり、閬州の人々は恐れ慄いた。このとき州知事が不在であったので、公が州政府を指揮して兵乱への備えをしつつ、同僚を連れて楼台に登って酒宴を開き、民衆の心を鎮めた。兵乱は内部で異変があって崩れ、州境に影響が及ぶことなく終わった。……(中略)……

しょうふ祥符県の知事になると、祥符県には富貴の家が多くあったのだが、公は徭賦ようふ(民間に課せられる労働と物的負担)を公平に負担させ、争いをなくし、民衆はそのやり方をよしとして安心した。ごうしょじゅ郷書手(徭賦の手配をする土地の有力者)の張宗ちやうそうという者は、それまでずるがしこく振る舞って利益を得ていたのだが、公を畏れ、病気になったと称してその職務から去り、代わって自分の息子に引き継がせようとした。公は、その息子は不適格であるとして、法に基づいて認めなかった。張宗はもともとから権貴の人々と通じていたので、開封府かいほう(首都近辺を治める府政府)に訴え出た。開封府から祥符県に実情を視察する役人が派遣された。公はあくまでも張宗の息子を処罰したところ、次に都から宦官かんがん(宮中の仕事をする特殊な役人)が来て、皇帝の意向だとして、張宗の息子を郷書手にせよと言った。公は法を根拠

にそれには従えないと応えた。するとまた別の宦官が来て、「法にはずれても張宗の息子を郷書手にせよ」と迫った。公は開封府知事の李絢りけんに向かって、「一人の民間人がこのように法を乱そうとしていて、府政府はそれでよとするのか。公は県は法を守ってはいけいと言われるのか」と言った。李絢は愧はじ、「明日、朝廷に参上してこの件を申し上げる」と答えた。李絢が言上すると、皇帝は「これが朕の意ではない。祥符県の知事は誰であるのか」と言った。李絢は公の名を告げると、皇帝は褒め称えた。そして皇帝はどうしてこのようなことになったのか調査させた。しかし、当時皇帝に最も寵愛されていた張貴妃ちやうきひの一族の誰かが張宗から賄賂を受けてしたことであるらしく、深くは追求することができなくて、偽の皇帝の命令を伝えた者だけが処分された。包拯ほうじやう(中国の大岡越前のような超有名な)が公に会って、「貴君は一県令としてよくそのようなことをした。朝廷の諫官かんかん(官僚の紀綱を取り締まる役目の者)も遠く及ばない」と感嘆した。公はある日のこと、ぼろぼろの衣服を身に付け、水を背負う娘を見た。娘は振り返り、「ああ、蘇士曹様ではございませんでしょうか」と言った。公は不思議に思って娘に尋ねると、「わたしは廖戸曹りやうこそうの娘にございます。いまは流落して人に使われる婢はしためとなっております」と言って泣き崩れた。公がかつてある町で士曹の職にあったときに、戸曹の職に就いていた廖という同僚がいた。公は悲しみに沈み、娘の主人を訪ね、金を出して娘を家に引き取った。そして家の中で礼儀正しい者を選んでその娘に礼儀作法を教え、元の同僚仲間の家に嫁がせた。……(中略)……

利州路りの提点刑獄ていでんけいごくに抜擢され、赴任する道すがら閬州に通るかかると、公を見ようとする民衆が続々と集まって来た。子供たちが公の周りを囲み、公が手を振っても去ろうとしなかった。公は言った。「私がここを去ってもう二十年になる。諸君等はよもや私のことは知るま

いに。子供らは答えた。「父や祖父からあなたさまの政<sup>まつりごと</sup>について伺っております。家にはあなたさまの画が飾っております。あなたさまがまたこられると聞いて、ぜひ見たいと思ってこのように来たのです」。公は笑い、「なんとまあ、こういうことになっているとは」。……  
(中略)……

公は嘉祐七年八月乙亥に、病気でもなかったのに俄かに亡くなった。役所の人々も民衆も皆声を失い、閩州では市を閉ざし、ともに市中で仏事を行って、公の恩に報いようとした。享年は六十二であった。……(中略)……

公が亡くなって二十七年が経ち、公の子の不危<sup>ふき</sup>が公の事績を従兄弟の轍に授け、このように言った。「父が亡くなり、その後、二人の兄も亡くなりました。いまは私がいるだけです。きちんと記録を残しておきませんと、いつかは散逸してしまいます。それよりも大きな不孝はありません」。私轍は生まれて九年にして郷里で初めて公に会い、後に雍丘<sup>ようきゅう</sup>で公に会った。公が話すのを聞き、公の遺烈<sup>いれつ</sup>を記憶してはいるけれど、公のされたことのわずかに一つか二つしか知らなかった。そこで慎んで公の事績をまとめ、墓碑に記すことにした。

私轍と兄の軾は幼いときに伯父上にお会いし(蘇序が亡くなったので帰郷したときのこと)、このように話されるのを伺った。「私は子供の頃から読書に励み、師を煩わさず自分で学んだ。少し成長すると、毎日文章を書くことを日課とし、完成するまで止めなかった。外に出歩くときには、礼法に合致するようにし、家の中にいるときにも、姿勢を崩すことはなかった。私だけがそしていたのではなく、私の仲間は皆そうであった。そじゃないと、郷里の者から、「なんだ、あれで儒学を学んでいるなどといえるのか」と後ろ指をさされた。だからこの当時は、学問はする者は多くなかったけれど、誤った行動をとる者がいるとは聞かなかった。私

は都に出て官職に就いてから三十年になった。帰って来て我が郷里を見るに、琴の音が響き、詩を唱える声が聞こえ、儒者の服を着る者が他郷よりもたくさんいる。それを私は嬉しく思った。諸君等も人に遅れることなく、私が過ちが少ないのを見習うようにしてほしい。私たちは「謹んでお教えを受けます」と頭を下げた。……(中略)……

伯父が亡くなり、後から生まれた者は老成の人の言葉を聞けなくなった。師と仰ぐべき指針がなければ俗に流れてしまう。私轍は子弟が日々に怠るようになるのを恐れ、伯父について聞いたところをこのように記し、後の戒めとする。

蘇軾はこのような伯父を手本とし、陳知事に鍛えられて、官僚として成長して行ったのである)

## ■跋醉道士図

蘇軾は鳳翔を12月半ばに発ち、<sup>ちやうあん</sup>長安で<sup>せきそうじよ</sup>石蒼舒、<sup>おうく</sup>王頤といった人々に歓待され、年明けまで過ごした。石蒼舒は書の収集家、王頤は画の収集家で、蘇軾は芸術について大いに論じ合った。王頤はひどく酔っ払った道士を描いた画を蘇軾に見せ、画に紙を貼り足した紙に何か感想<sup>ぼつぶん</sup>(跋文)を記すよう求めた。

私はもともと酒を喜ぶ者ではない。王頤の持つ<sup>すいどうしず</sup>「醉道士図」を見て、私はこの<sup>しつ</sup>執杯持耳翁<sup>はいじじおう</sup>をはなはだ恐ろしく思った。

(わずかこれだけの文章であるが、蘇軾と酒の関係がよくわかる。蘇軾は酒を好み、

酒にまつわる詩文もたくさんあるが、実はアルコールにはさほど強くなかった。「執杯持耳翁」はたぶん蘇軾の造語で、意識すれば「徳利奉行親翁<sup>とつくり ぶぎょうおやじ</sup>」で、つまり、やたらに「呑め、呑め」と強いるアルハラおじさんである。）

これから数年後に、再び長安にきた際にこの画を見ると、蘇軾の跋文の後に章惇<sup>しょうとん</sup>の書き込みがあったので、蘇軾は次のように書き添えた。

熙寧元<sup>きねい</sup>(1068)年十二月二十九日、私は長安にきてある人を訪ねたところ、王頤<sup>おうく</sup>がわざわざ「酔道士図」を携えてやってきて、弟や幾人かの友人の前にそれを広げて披露した。私がかつて記した一文の脇に、章惇<sup>しょうじゅん</sup>が「大いに笑わせてもらった」と書き記したのを見て、皆が私のことを笑った。

私はこの画の酔道士ばかりでなく、世の持耳翁<sup>じじおう</sup>全てを畏れるのだが、章惇<sup>しょうじゅん</sup>はといえば、持耳翁<sup>じじおう</sup>にいくら「呑め、呑め」と言われたところで、まだまだ呑み足りないと思えるに違いない。

酒にはたくさんの味わいがある。残念なのはそれを知る者が少ないことだ。持耳翁<sup>じじおう</sup>はただたくさん呑むのがよいと思っている。

私は山水を巡り歩くのを好む。しかし、章惇<sup>しょうじゅん</sup>と同行したときに仙遊潭<sup>せんゆうたん</sup>の深い崖を渡ることはしなかった。やたらにどこにでも行けばよいというものではないからだ。

私はもともと酒を多く呑むことをしない。持耳翁<sup>じじおう</sup>などと深く付き合ったりはしないのである。

(仙遊潭とは先に見た章惇との小旅行(本章 97 ページ)で訪れた場所。章惇は絶壁を飛び降りるようにして下って谷底に達すると、その岩に落書きをした。蘇軾は自分も行けるとは思ったが、敢えて危険を冒すのを避けて上に留まった。蘇軾は章惇との性格の違いをことさらに強調したこの文章で人々を楽しませたのだ。章惇は後に蘇軾とは政治的に対立するが、十数年後に張璠(本章 89 ページ)とは対照的な行動を取る)

## ■華陰寄子由

治平<sup>じへい</sup>2 (1065) 年、蘇軾 30 歳。

年が明けると、蘇軾は長安を発ち、華州<sup>か</sup>で胡允文<sup>こいんぶん</sup>(「鳳鳴駅記」の執筆を依頼してきた人)に会うなど人々と交遊しつつ都に向かった。これは華州を過ぎたあたりで弟に送った詩。

この三年の間、帰ることを思わない日はなかった。

夢の中で家に戻り、

しばらくしてから、現実でない気付いたこともあった。

十二月の祭日に、酒を酌んで寒さを忘れようとしたときも、

ただ家に帰ることばかりが思われてならなかった。

一月のこの旅では、春を呼ぶ東風が吹いているはずなのに、

雪が衣にまどわりついてくる。

いま僕は、天に浮かぶ華山<sup>かざん</sup>の三つの峰の下を通り過ぎつつある。

じきに、潼関<sup>とうかん</sup>の四つの扉が日を浴びて開かれるのを見ることになるだろう。

そうすれば、都までの一里塚を全て数え尽くすのを妨げるものはもう何もない。

だから、君はいますぐにも、

家の御馳走を携えて、僕を迎えに出るのがよいのではないのかな。

(潼関は長安のある盆地(関中)と、その東の平野部との境目にある難所。この詩でいう「家」は故郷の眉山のではなく、都に住まう父と弟の家である)